

百 科

理

新 譯

話

特 25-942

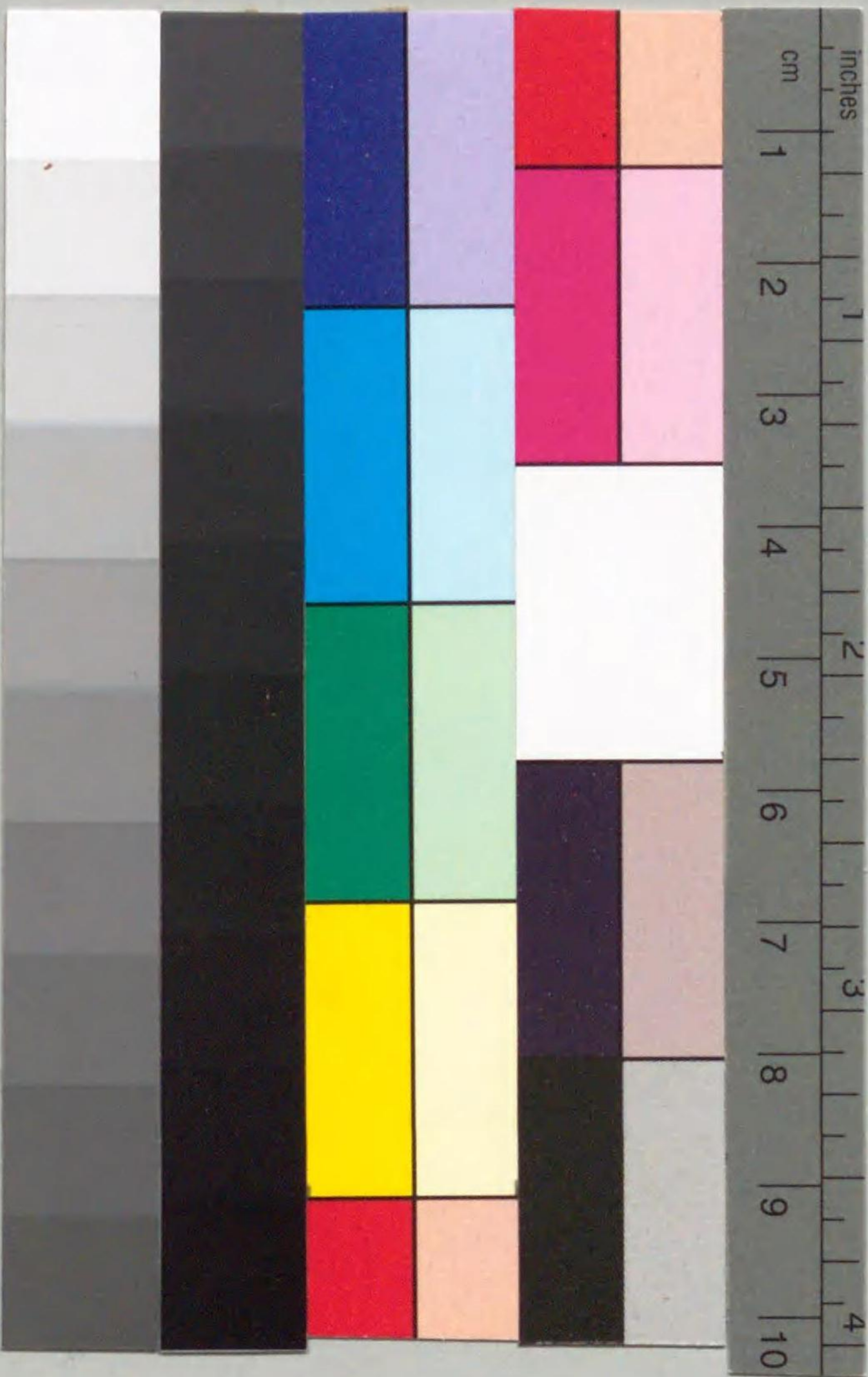


\*1200500804359\*

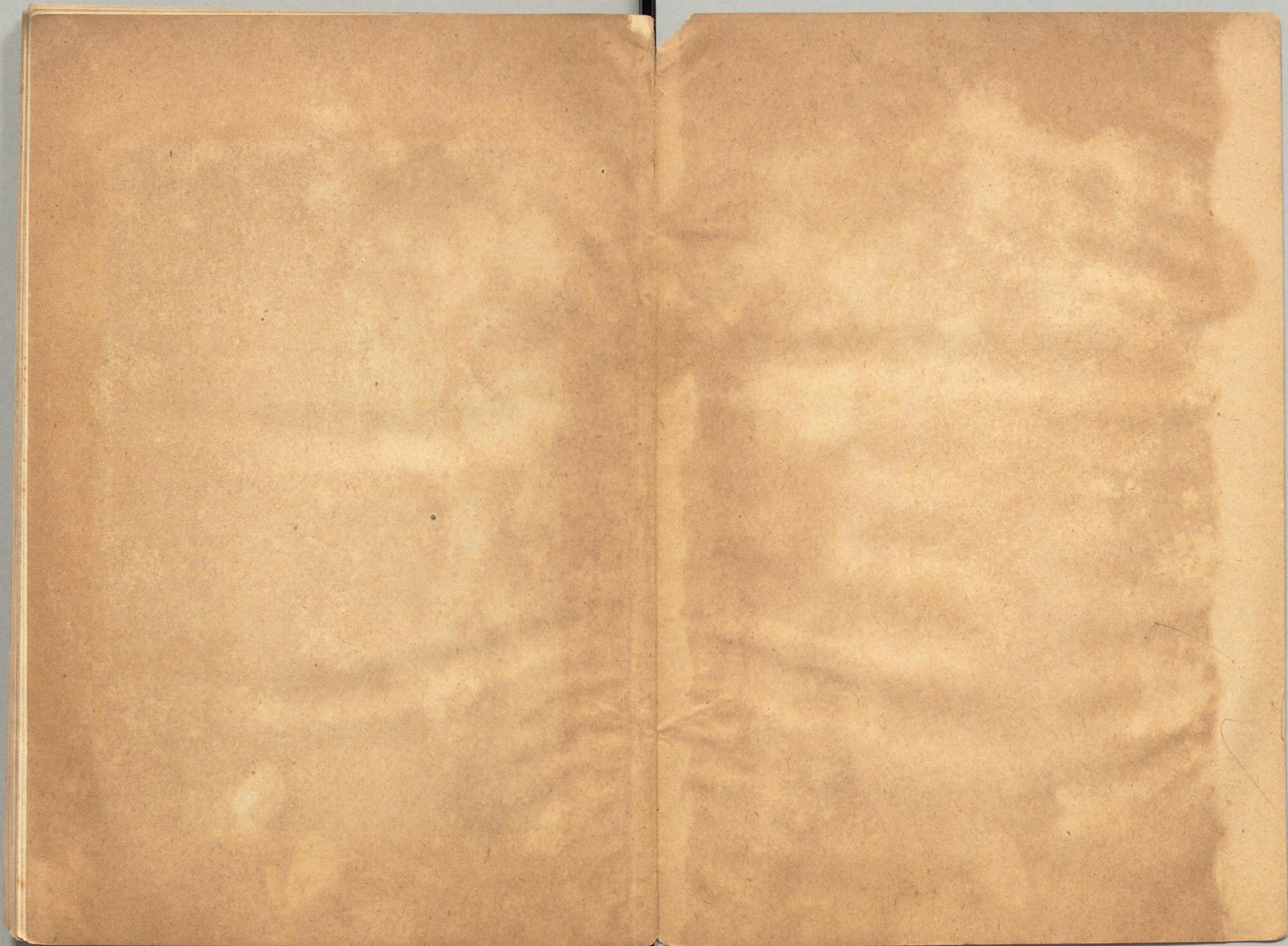


268  
135

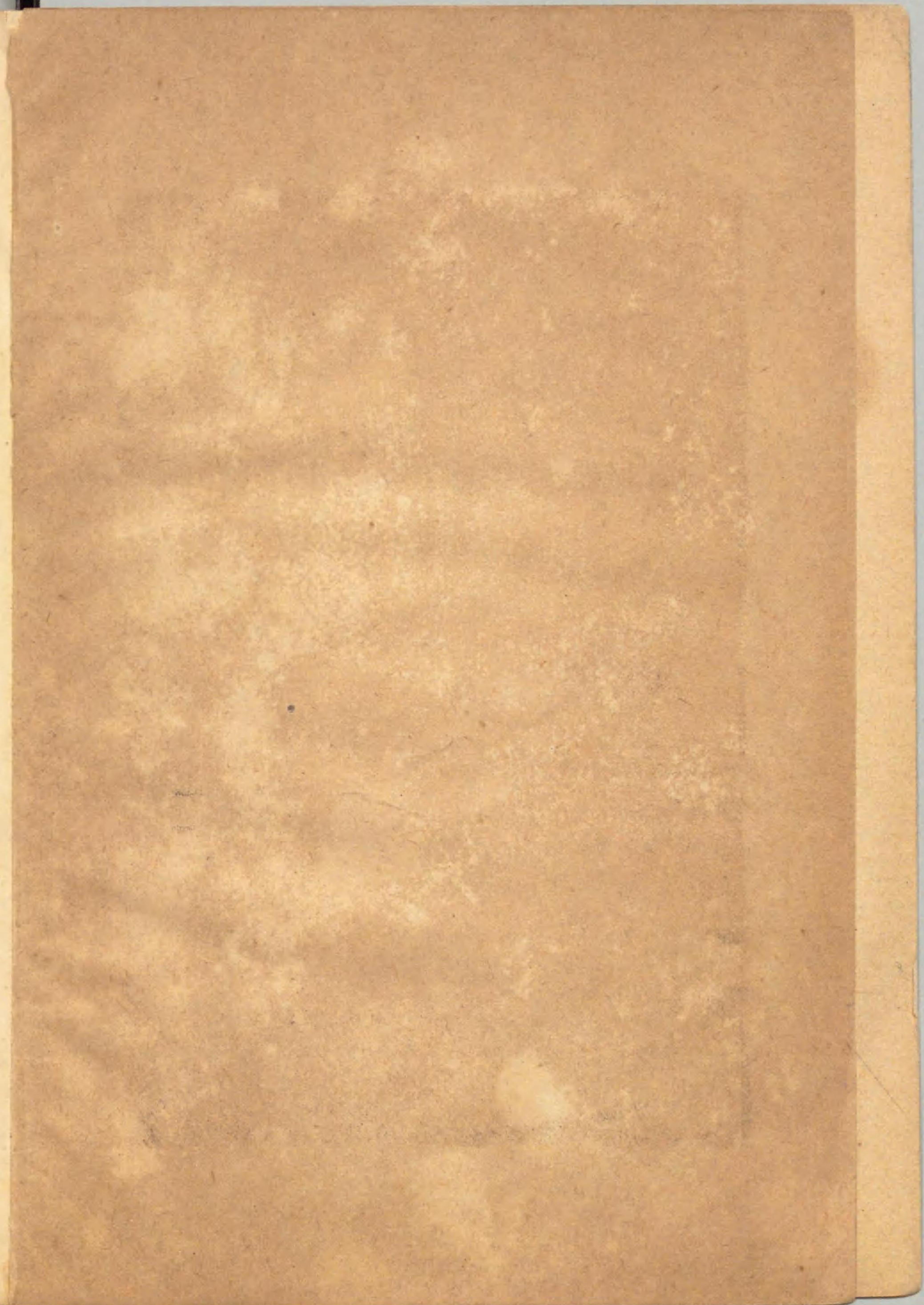
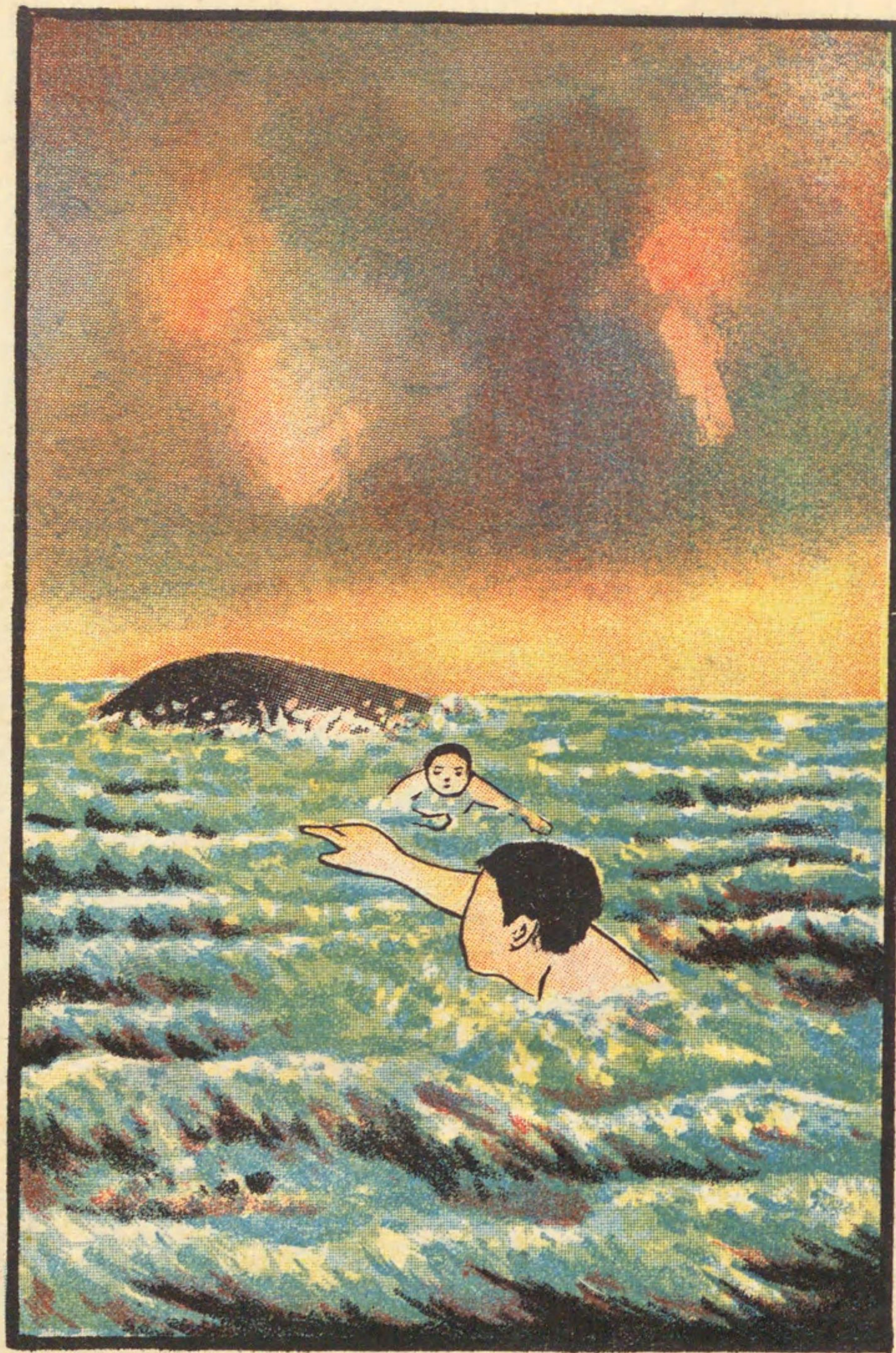
編 一 第



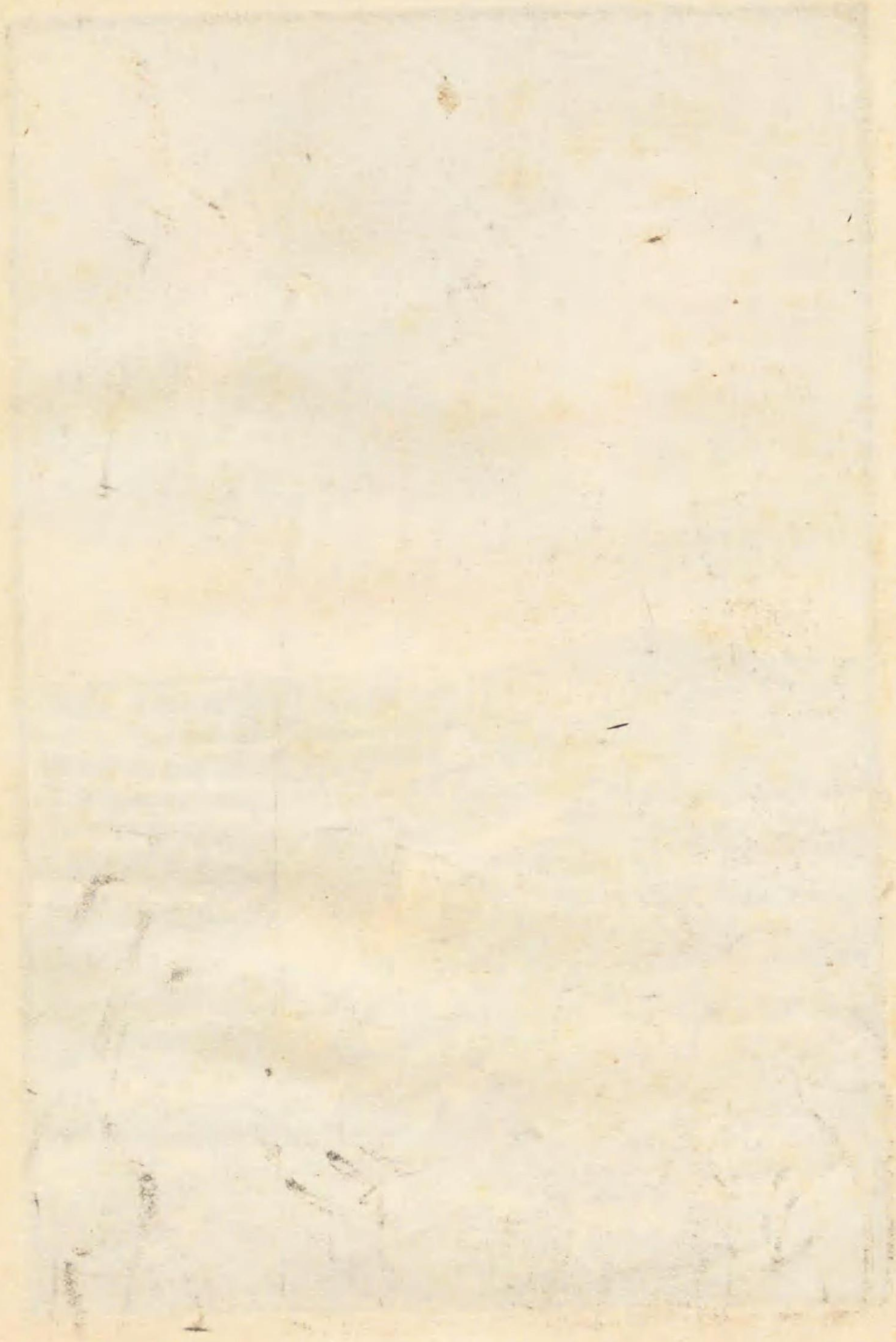














特25  
942

新お伽  
理科百話目次

- 一、不思議な小島……………(鯨)……………一頁
- 二、大鵬の行衛……………(月と太陽)……………六頁
- 三、海底の小蟲より……………(珊瑚蟲)……………三頁
- 四、庭園の合戦……………(蟻)……………一七頁
- 五、活動寫真……………(光線の直進と小孔によりて生ずる像)……………三三頁
- 六、神経系遊覽記(その一)……………(神経系)……………三〇頁
- 七、神経系遊覽記(その二)……………(神経系)……………三五頁
- 八、神经子僧のいたづら……………(腦神經)……………四〇頁
- 九、手品つかひ……………(空氣の壓力)……………四五頁
- 一〇、愛犬の末路……………(輕氣球と飛行機)……………五〇頁

目次

一





目次

一一、羊追ふ笛……………(プリズムと虹)……………五

一二、山の魔石……………(磁石針)……………六

一三、不思議な溜池……………(電池)……………六

一四、野邊の別れ……………(秋の七草)……………七

一五、凸坊の日記……………(蟬)……………八

一六、海底の會合……………(空氣及水の成分と飛行機)……………八

一七、海底の無線電信……………(電波及無線電信)……………九

一八、カミナリ男……………(蓄電瓶と放電叉)……………九

一九、機織姫……………(露、飽和蒸氣、露點)……………一〇

二〇、母の面影……………(血液、心臟、全身循環)……………一〇

二一、腹中の盲目……………(條蟲、蛔蟲、十二指腸蟲)……………一一

二二、夜光の玉……………(夜光蟲)……………一二

目次終

二三、ホタテガヒとハマグリ(ホタテガヒ、フシツボカヒ)の喧嘩……………一三

二四、森の秘密……………(紫雲英)……………一四

二五、猿ヶ島大王……………(猿と人間)……………一四

二六、煙突の涙……………(石炭と鐵)……………一五

二七、檜の木と牛……………(動植物相互の關係)……………一五

二八、母の戒……………(かれひ)……………一六



晰伽理科百話

一不思議な小島

吹く風もなま暖い或盛夏の朝のことでした、いつもの如く海岸へ散歩に連立つて来た次郎と太吉とは、急に沖合に眼を注いだま、驚倒の餘り其處に立止まりました。こうして二人を驚かし不思議の眼を見張らしたのも無理は無いのです、實際不思議な現象が海邊に起つて居るのですもの。サアその驚く可き不思議な現象とは何んなこととせう。

昨日迄塵一つ眼を遮るなき海中に不思議く一夜のうちに小島が  
鯨は魚類に非ず

育成會編輯部譯



ピヨコリ出来てゐるのです。

いつも學校で先生から、コロンブスのアメリカ発見やブアスコダ  
ガマのお話に心を躍らし、陸地の発見てふことに心を動かされてゐ  
る、次郎と太吉は、さつき不思議だと驚いた感も無くなつて、小躍  
して『島！いや島だ！小島の発見！』と叫びだしました。そうして  
云ひ合した様に着物を抜き棄て、ザンブとばかり海中へ飛び込みま  
した、初めの程は勇氣に満ちてゐますから、抜手を切つて泳ぎまし  
たけれども、陸で見えたりもその小島まではなかく、距離がありま  
す、腕がだんぐと弱つて来る、仰きになつたり横に浮いだりしま  
すけれども、なかくその小島まで近づきませぬ、ふと、顔を上げて  
小島の方を見た次郎は、顔が眞青に變りました、そうして後ろから  
仰けに遊いで来る太吉に叫びました、『おい太吉君歸ろう、たいへん

だ早く歸らぬと如何様目に合ふかもしれないよ！怪物だ怪物だ！』

これを聞いた太吉は、そんな馬鹿なことがあるものかと思つて信  
じませんでした。けれども次郎が陸の方へ向いて一心に浮いでゐる  
ので、急に心寂しくなりました、で島へはまだ距離が餘程あるだろ  
うかと思つて、頭をふと持上げて眺めますと、その時しも小島の附近  
には波浪が起つて、小島が右方左方に動き初めてゐるのですもの。  
これを見て取つた太吉の喫驚はいかばかりでしたらう、もう氣も心  
も失せて、抜手を切つて陸の方へ浮ぎ付こうとしても、肝要な腕が  
きゝませぬ、あせれば焦心する程、浮ぐことが出来ないので、それ  
に刻一刻に怪物が背後へ迫つて来る様に感じられました、取殺され  
るばかりだと思ふと、可懐しい父母や姉さんの顔が、絶間なく押寄  
せる波浪間に見える様に思つたが、折悪しく大きい波頭に吞まれて



しまいました。  
 夫れでも有りたけの力を奮つて何處かしらぬ、漸々岩角に取りつ  
 きました太吉は、ホツと息吐くと其儘死んだ様に眠つてしまいまし  
 た、ウトウトとするやと枕頭へ、白い雪の様な髭の崇高な翁が現出ま  
 して、太吉々々と呼びました、太吉は驚いて飛起きて翁の前に跪き  
 先刻からの怪物の話を洩れなく致しました、そうして救助を乞ひま  
 した。翁はこの話を聞き終つて、破顔一笑して太吉の頭を撫でなが  
 ら、それは怪物でなくて、鯨といふ海中に魚類の様にして住んで居  
 る獸類である、そうして懇に鯨に就て話して呉ました。翁は語をつ  
 いで、鯨は頭大きく胸が圓錐形で、小島の様に見たのも無理がない  
 事や、尾は魚類の様に左右に分れてゐて前肢は鰭の如く、後肢はだ  
 んぐ、頰化して全く無いことや、呼吸は人間や他の動物の様に肺で

すること。そうして頭の上に呼吸する孔があつて潮吹ときはこの孔  
 より出ることや、魚類の様に冷血でなくて温血のことや、兒は卵子  
 でなくて胎生して乳で養ふことなどを、詳細に説明して呉れました。  
 太吉はこゝで初めて自分が學校で理科の時間に缺席したことを、翁  
 に後悔しました、翁は太吉に今後熱心に理科を勉強せよと、頭を撫で  
 ながらカラ／＼と打笑ひましたと思ふと、翁の姿はこの時搔消如く  
 消えてしましました。太吉はまたこの寂しい無人島に獨りになつた  
 のかと思ふと、急に悲愁なつて、シク／＼泣き出しました。  
 この時、太吉々々と呼び起すものがあります、誰れかと思つてゐ  
 ると、肩をやさしく揺動ながら太吉々々と連続さまに呼ばれるので  
 す、と同時にその邊の暗黒がだん／＼明るくなつて來たかと思ふと、  
 ふと眼が開きました。枕頭を不思議に見渡すと、波に搔浚はれたそ

鯨は魚類に非ず



の時、今一度やさしい御聲を聞きたい顔を見たいと思つた、可懐しい父母兄弟が皆自分の枕元に座つて居られるのでした、太吉の喜びは幾何でしたらう。

## 二、大鵬の行衛

寺島月男は今年十四の男々しい少年でありました、月男の父は天文学者ですが、月男が丁度十三の秋父は月や太陽に就ての新発見を社會に發表せず死んでしまいました。誠に父母の死に遭遇つた程悲哀いことは世間にまたとありません、普通の少年ならば唯泣くより外は無つたでせう、けれども兼てより聰明穎智に養育られました月男の事ですから、女々しく泣いて計りませぬ、父の遺志を繼で自分も天體を研究せようとの大望を起しました。

嘗て父の存命の頃、父が研究室で妙な機械を弄くりながら太陽の光線を分拆してゐました時、月男は太陽に就て色々な話を聞いた事がありました、これは光線分拆術と云つて、物の光を分拆して其光が何から來るか調べるので、地球の成分になつてゐるものと、太陽の成分に成つてゐるものとは大抵同じで、鐵だのマンガンの水素酸素だのですが、地球はそれが燃えてゐないのに、太陽は全體が渦を巻いてぼつぽと燃えてゐて、その光と熱とお陰で我々人間が生きてゆくことが出来るのだと父から云つて聞かされた事がありました。月男の今度起した大望と云ふのは月世界の探險なのです、月男が昨年秋、父を失した夜も月の光が父の臨終の枕元を寂しく照してゐました、日時こそ夢の如く過ぎゆきましたとは云へ、いつもかわらぬ同じ月の光がこの頃の考へに耽つてゐる月男の書齋を照らすの



です、ある時は悲しく、ある時は美しく、ある時は神々しく、見る人の心によりて千々に變つてゐますが、皆同じい月なのです。

月男はこの頃毎夜、鎮守の森へ出掛けるのです、そして自分も父の様に立派な天文學者となつて、月の世界を探険してみたいと神へ祈禱をするのです。今宵も月の明るき夜で、月男は唯獨りトボくと鎮守の神社へ參詣に來ました、やがて社前へ叩頭一心に祈禱を捧てゐますと、急に境内の樹木の梢がザワと音たてて、何とも云へぬ物寂しい光景に變りました、それでも月男は一心に祈禱してゐます、風は益々強くなつて、松や杉の大樹の梢はブツとと壓つてゐます、と突然大地も震ふ計りの音が南の方向から起つて來て、社前へ近づくのです、月男は猶一心に叩頭いてゐました、ふと頭上を強風に叩かれてハツと思つた刹那、大鵬が一羽自分の前にスクンでゐ

ます。やがて風が休みまして附邊はまた以前の静けさに還りましたと思ふと、社殿の扉が静かに開く音がして馥郁とした薫が月男の前に近づきますので、恐るゝ頭を上るとフワと地上を離れるのです。ハテと思つて心付いた時は彼の大鵬は神様と同乗てズンと陸地をはなれてゐるのです。

『月男！ 月男！ これからお前の望に依つて月の世界に旅行するのだ、心配することはないえ、驚いたか……アハ、』と從順く聲を懸けられたので月男の心は直ちに愉快に變りました。神様に向つても色々なことを質問しました、神は一々指圖して教へたり、いと親切に答へて下さるので月男は可懐しい我家を離れた事も何も彼も忘れてしまつて、唯々月の世界へ急ぎました。地球から月への距離は九萬五千里、太陽への三千八百萬里に比較ては遠いやうなもの、



まだ近い方なのです。月男は大鵬の翔けるのを初のうちはその早いのに驚きました。いまはだんぐもどかしくなつて來ました。試みにふと下界の地球を見下すと、もう二三十里も昇つてゐます。山も川も明瞭とは區別がつかぬ位で、そうして呼吸がだんぐ、苦しくなつて來るのです。空氣が薄くなつて來るのだなと思つてゐると、同乗の神様がこれを見て、『月男これを口へ入れて置き給へ』と云つて一つの空氣袋を呉れました。月男はこれを口中に含みますと、今迄息苦しかつたのが急に自由になつて神様に向つて又色々な質問を致して、太陽の直徑の三十五萬三千里あつて地球の直徑が三千二百四十里あることは父から既に聞いてゐましたが、月の直徑の百九里しか無いことを神様から聞いた時は、少なからず失望しました。けれども月蝕とか日蝕とか不可思議の現象があると聞いた時はさすがに

胸の躍るを禁じ得なかつた程です。満月の時にはまた月蝕となるので、その暗黒くなる部分は地球の影であることや、月はまた太陽と地球との間に入つて來て太陽の光を遮ぎることがあるこれが日蝕と言ふので、下界では眞晝でも急に太陽が一部分黒くなつて、薄暗く日暮れ頃の様になるので、この間に色々な怪物が出ると騒ぐのだと神様はその大體の説明をして呉れました。

神様と月男とが、こんな會話をしてゐるうちに、早や月の世界近くなりました。近づくに従つて思つたよりも、漸々大きくなつて來ます。高地もあれば低地もあるのが見え出して來ました。火山の様な山もあるけれども地熱がなく、全く暗黒です。今迄下界で見て『美しいお月様！』と思つたのも、近づくに従つて餘り美しくもありません。美しいお月様！』と思つたのも、太陽の方から來る



光線を反射して美しく輝いてゐる様に見えるのです。下界で見た時に兎が餅を搗いてゐる様な處は、水の少しも無い海や湖や河川の跡で、人間や動物の居ないまた植物などの生えてゐない陸の山や丘などの跡なのです。この不思議な眺めに月男は夢中になつてゐるうちに、大鵬は月世界の一つの山の嶺に下りました。神様に肩を軽く叩かれて、漸く心地付いて大鵬の背から下りました。山嶺に屹立つて四方を眺め見渡します月の世界！山勢奔騰は、逸馬の如きもあれば、巖徑崎嶇、劍の様なものに眼に映する、地球ならばこのあたりには緑の松の、青色の滴る様な杉樹の壑が有るのですが、こゝにはそんなものは一つも有りませぬ、山影を倒にうつす緑の湖心もなければ、青壘を敷いた様な汪洋とした海のながめもありません、これ等は唯一滴の水だに無き乾涸た窪んだ地面の跡ばかりです。月男は少なからず失望した、けれどもこの失望のうちに新発見を豫想した、いよゝゝこれから實地の探險だと心のうちに叫びました。

月男はまだ月の世界から歸つて來ませぬ、たぶん月世界に踏止まつて、探險の事に可憐しい我家をも忘れてゐるのでせう、大鵬の行衛と共に月男の姿はこの地球の上の何處の町にも村にも里にも見當らないのです、そうして夜な〜の月の光に變りはありませぬ。

### 三、海底の小蟲より

私の様な海底のチツポケな虫が、立派な人間達の頭の上へ昇つて可愛がられると申しますと、諸君はさぞ私が生意氣な言を吐くと思慮なさるでしよう……けれどこれから私のお話することをお聞に



なれば、成程そうか可愛蟲だと思召に違いが無い。

「誰様です！ 私の姓名を前に言へと……」成程私は姓名を諸君に申し上ぐる事を忘れてゐました、けれどもそれは今申しますまい、いづれ私の生涯をお話すれば成程アレかと諸君に合點がゆくでしやうから、さて私の身體の形態はマア圓筒形と申しませうか、そうして口のまはりに多數の手がありました、骨格も肉も共同であります。こんなでありますから獨りでは弱くていけません、それですから甲君も乙君もと多數互に力を合せ共同の肉と骨格とを作成つくりまして、水中に浮べる小さき植物などを食ふのであります、その時に口邊の手がたいへん役立つのであります。私共はまた攝氏二十度以上の水溫の有る處で、海の深さが四十米に達せない清澄平穩なる淺海によるこんで蕃殖ますのです。さてこんな物が何故人間の頭上に乗

かつたり時計の鎖にぶら下つたり、煙草入の附屬品となつたりするのですか、こゝで姓名を申しては興味がありませんからいましてばらく秘密にして置きまして、唯私の骨格だけがそんなに人間に可愛されるのだと申して置きませう。私共はまた盛に炭酸石炭と申すものを分泌しましてこれが海中に礁を造るのであります、礁は南太平洋に最もたくさんでインド洋大西洋は其次ぎです、日本の近海では臺灣琉球小笠原島に見ることができませう。この礁にも種々な家系がありました、海岸にあるものを岸礁家と申しまして、海岸から離れて帯形をなしその間に海水を挾むものを堡礁家となへます、そうして第三の家系がよく諸君の雜誌等の口繪などでご覽になる、海中に孤立で不規則環形をなして、その環のなかに靜穩な海水を湛へてゐるものを環礁家と申します。こんなふうにいるゝな家系がありま



すが、これも皆私共を祖先といたしますもので、つまり私共の分家  
であります。

世界が漸々文明開化ますに従つて、種々な方面に競争てふことが  
起りまして、この競争から敗北ました者はこの世界から亡されてゆ  
くのです。この近年になりました真珠とか申しまして、あこやがひ  
から出る珠だそうですが、この玉は銀色で透明つて瑪瑙の如だと申  
します、これが私共と競争をしてゐます、真珠とかの勢力もなかな  
か馬鹿に出来ないで、私共もこんな者に亡されない様に全力を注  
いで競争してゐます、私共の同勢は、あかさんご、うみまつ、びわ  
がらいし、みどりいし等でございましてあかさんごは地中海江海べ  
ルシヤ灣セイルン島のものが名高くて、みどりいし、びわがらいし  
等は熱帯の海洋にできます。

さて私の生涯の大體はいま申し上げた如くです。で、私の姓名は珊  
瑚蟲と申します、骨格は珊瑚と申しますので珊瑚礁だの珊瑚島だの  
はみな私共の分家や別荘や親戚でございます、終りにのぞみまして  
これから益々御引立下さることを諸君へまでお願いいたして置きます。

#### 四庭國の合戦

時はちやうど彌生の初めで、園内の築山は翠色を飾り色々の花が  
縦ひ初めまして、樹々の梢に鳥の囀りも悠然で、吹く春風も暖い或  
る日の午後のことでした。

五疋の斥候蟻が、築山の裏に陣取つてゐる、黒蟻の城塞の附近を  
悄悄に偵察してゐました。黒蟻の歩哨はこの赤蟻の斥候の動作を既  
に數時間以前に氣付いてゐましたが、これを捕虜にいたそうといふ



考へから、その手順に及びまして油断を見せかけておりました。こんな大難が目前に逼つてをらうとは、夢にも知らぬ赤の斥候兵は城近くへ忍寄りしました。斯くと見た歩哨は今こそと合圖の口笛を鳴しますと、何處に隠れた居たものか、大勢の蟻が四面から不意に起りまして、彼の斥候兵を相手に戦闘を開始しました。何を小癩なと五騎の赤蟻は必死となりましたが、衆寡敵せずとうとう捕まりました。大勢の職蟻に取巻かれて、やがて主蟻の面前へ引据られた時は五騎の赤蟻は半死の有様でして口もロクく利ませんでした。

蟻の中に、主蟻だの職蟻だのと種類のある事は諸君も御存知でせうが、この主蟻と申すのは其種族の王様で誠に威張つたもので、職蟻はこの王様の奴隷となつて一切の仕事をしてゐます、こんなに萬事を奴隷蟻にさせておりますから自分一人で働く事も出来なく、自

分獨りで食べる事さへスツカリ忘れてゐるので、若しも奴隷蟻がゐない時は、食物が眼の前に在つても、それを取つて食べる事が出来ないのです。空しく餓死する事さへあると申す位です。

さて捕虜となつて王様の前へ引据られた、赤蟻は半死の境から頭を上げて見ると、さも威張つた口調で女としての使ふ言葉も忘れたと云ふ風體で……

『コラ貴様達は赤蟻軍からの間諜だろう、正直に告白せぬか……』

『赤蟻の戦闘準備はどれ丈迄進んでゐるか包まずに告白せよ、そうすれば貴様達の生命は救けて遣はす……』

赤蟻『ハアハ、手前共は決して左様な……』

『馬鹿を申せ、告白せぬと死刑だぞ。』

いくら威嚇したつて騙したつて、敵の内情を告白しそつともありま



せぬ。手を代へ品を代へて告白させやうとしますけれども、手強く告白する希望もありませぬ。王様もこれには幾殆閉口して、職蟻に勝手に捕虜の處分をする様にと命じて、巢へ入つてしましますと一緒の頃穴口の歩哨が盛んに騒いでゐます。王様は巢の中で何だらうと色々想像してゐましたが、喧擾が大きくて何だかさつぱり不明ませぬ——と突然『敵だ！ 敵だ！ 敵の襲撃だ！』と叫ぶ聲が聞えます。

王様は氣も狂ふ計りに驚きました、ガタ／＼震へてゐるのです。城外では鐵砲や大砲こそなければ、赤黒の兩軍の蟻が組打や噛合を始めて、怪我をする者殺されるもの一大修羅の巷が現出てゐます。そのうち黒蟻軍がだん／＼勢力が弱つて來ます。勝つた赤蟻軍は勢に乗つてだん／＼城内へ逼つて中へ這ひ込みます、マゴ／＼してゐる

敵を口外へ逐ひ出して、ズン／＼巢の底へと進んでゆきまして、さつきの五疋の斥候兵も救けて、戒の繩も解き共に其處にある卵や子供(幼蟲)や蛹を、占領できるだけ名々持つて巢の外へ引返します、その有様はさながら勝ち誇つた日本兵の様に、ぞろ／＼自分の巢へ占領品を引きあげてゆきます。

泉水の汀、背水の陣をとつてゐる赤蟻軍は今や全勝の喜びに満ち満ちてゐます。これが國家と國家との戦争でありますと、陸軍ならば敵の大砲や小銃や兵糧を分捕りした如く、海軍ならば敵の軍艦を捕獲しやうといふのですが、蟻だけに流石優しく、巢の入口には敵の卵や子供の分捕品がたくさん積まれてあります。園内の日脚は過ぎて、夕陽のチラ／＼とした黄金色がこの占領品を輝かして、一層戦勝の誇が見えます、さて庭園の合戦はこゝに夜の帷幔とともに

蟻



終りを告げました。この分捕品の處致は、これを養育して大きくして自分方の奴隷にして仕舞ふのです、大きくなつた蟻はたとひ捕虜としても舊の巢へ逃げ還つていけませぬが、併し卵子や子供は大きくなつても逃げ出すなんて事なく、おとなしく命じた仕事をしますで戦勝品としては必ずこれ等を分捕るのです。

### 五、活動寫眞

直吉は昨日日曜を幸ひ、お父さんに強請つて淺草の活動寫眞を見物に行きました。其歸途に上野の動物園を見せて貰つたので、さすがの直吉も脚が搗粉木の様になつて疲れてしまひました。普通は六時頃から床を離れる直吉も今朝は容易に眠覺めませぬ、月曜日から遅刻する様ではならぬと、お母さんが數度呼び起しますけれども、

唯返事ばかりハイ〜と云つてゐて、なか〜起床の様子も見えませんでした。

直吉は床の中でまだ昨日の活動寫眞の夢を見てゐるのです、お父さんが急に歸らう〜と云つて直吉を急がすのです、ハイ〜と云ひ乍ら寫眞の茶目吉に心を奪はれてゐて空返答をしてゐるのです、と急にガスの燃える不快な香がして鼻が苦しいので、しばらくは藻掻いてゐましたが——フト眼が覺めました、枕元には弟の次吉がクス〜と笑つてゐました、恐怖顔をして瞰つけたので次吉は部屋を逃出してゆきました、直吉はボツとして床の中に考へてゐました、部屋はまだ雨戸を引かぬので暗黒です、庭は朝日が照してゐると見えて、雨戸の間隙から差込む光線は、その枕元の障子にいろ〜な形を寫してゐます、直吉はふと障子の光線で明るくなつてゐるそれ



等の枕元に近い一つを見るときもなしに見てゐますと、その障子の紙の明るい處へ何か寫つてそれが活動してゐます、ソツと枕を側へ置きかへて障子へ近寄つて見ますと、その活動してゐるものは、丁度昨日お父さんから買つて貰つた繪ハガキの猫なんです、ハテ不思議だそれが倒さに寫つてゐるのです、次吉の悪戯かと思ひましたけれど、それにしても活動するのが不思議です、直吉は熱心に凝視してゐますと、今迄倒さに寫つた樹木の根元に遊んでゐた猫は、何に驚いてか急にその木に駆昇りました、樹木も猫も皆倒さに寫つてゐて活動するのですから、活動寫真よりも面白いのです。この面白い現象を次吉にも見せてやらうと思つて、立上らうとする時、庭で愛犬エスが盛んに吼えてゐます、おやと思つて倒さの小活動寫真を見ると、サツキの樹木の根元に日頃直吉の愛するエスが倒さに寫つて、盛ん

に猫に吼えてゐるではありませんか、この不可思議の現象に直吉は學校の準備も洗面も朝飯も忘れて、その倒像の自然のまゝなるに驚倒いてゐますと、お母さんが再び起しにこられた様です、疊に足音がしてそれが部屋に近づきますと、サツト襖が開かれました、と彼の障子の倒像は、今開かれた入口から反射む日光に會つて消えてしましました。

『直さん！ おやお前何してゐるの？ 早く起きて學校へゆく用意をせぬと遅刻ですよ』

『ハイ……でもお母さん、僕サツキから起きてゐたんですけど……障子に大變不思議な繪が寫つてゐるので、それに見とれてゐたんです……』

『おや、お前はまだそんな事知らなかつたの？……その繪はね、



光線の作用で障子に寫つるのですよ』

『光線の作用つて何に……お母さん……？』

『マアこの子は、そんな事を言つてゐないで早く準備をせないと遅刻ですよ、お母さんの云つた事が不解なかつたら、詳細先生に質問御覽なさい、遅刻しては大變ですよ！』

ズツクの鞆を肩にした直吉の姿が門を飛び出したと見る間に、もう學校の坂道を駆けてゐます、光陰は人を待たずとか時間は直吉の遅刻する事には用捨しませぬ、いくら急いだつて直吉にはこの時間を左右することはできませんのでした。學校は授業が始まつてゐました。廊下を歩む靴の音にも氣を取られて、直吉は自分の年級の前に来ました、扉の鍵穴から窺きますと田邊先生が教壇に立つて何か生徒に質問しておられる處でした、ツツと扉を開きました直吉は、

顔が火の様に熱くなりました、生徒の誰彼の顔を凝視する勇氣はありませんでした、先生と同級生に一禮して夢中で自分の席に就きました。ホツト息を吐いて一安心と思つたのも束の間『樋口さん』と質問されるかと不安でなりません、オツ／＼机の側へ直立しますと同級生は回顧つて自分の顔を見る様な氣がします、『樋口さん、貴郎は何故遅刻をしたのですか』質問の意外なのに依違ひしましたが、今朝家庭での不思議な出來事を話しますと、他の誰彼も目引袖引して不思議な面相をしてゐます。直吉の話聞き終つて、田邊先生は『なる程、フム……そうか……』と云つたなり、皆の生徒に向つて『さて諸君！ 諸君の中で今樋口君の話した様な現象に相遇つた人がありますか、あるなら手を舉げて御覽なさい』『誰も手を舉げぬ處を見



ると、見た事が無い人ばかりですな？」  
 それはこうです諸君もその不思議に相遇ふことを希望ならば、諸君の家庭の日常の能い處の雨戸に小穴を開けて、部屋の中を暗黒にして障子に寫つるあかるい處を御覽なさい、そうすれば屋外の萬物が活動して見えます、若し障子の紙の代りにスリガラスに寫すと、障子に寫るよりも明瞭と見えて、恰も小さい活動寫眞のやうです、何故この小活動寫眞が倒さに見えるかと云ふにと田邊先生は言葉を次で、若し諸君が燭火と眼との中間に、小孔を穿ちたるボール紙を置いて御覽なさい、其小孔が燭火と眼とを結んだ直線の上に来るときだけ蠟燭火を認むることが出来ます、これに由りて光といふものは直線に進むもの即直進するてふことが分かります。さてこの光の直進と云ふ事が、樋口君の不思議に思つた倒像を造る原因をなすも

ので、若しそこに一本の樹があると假定して、頭の方を「イ」とし根を「ロ」としますと、其「イ」からの光線が直進して雨戸の小穴を通經して、障子の紙の一番下の方へ寫ります、「ロ」即木の根本から反射された光線は障子の紙の明るい部分の一番上の方へ寫ります。この理由で倒さに寫るので、其雨戸の小穴が小さい程、障子に寫る明るさが減じますが、倒さに寫る像が精細になります但し穴の形狀が圓くても正方形でもかまいません、寫る像に變りはありません。諸君は寫眞機を御存じでせう、寫眞の種板にも人間が倒さに寫るので、これと同様の理由で、倒さに寫るてふことは別に不思議な理由が無いのです。さて倒さの不思議が解けましたら、光の速さのお話を一寸申上ませうと田邊先生は益々興に乗つて、光の速さは、デンマルクの天文學者レーメルてふ人が一千六百七十五年頃に木星が衛星に



蝕された事に由りて初めて発見したので、此衛星は四十二時間程に木星の影の内に入つて蝕するもので、これ等のことから計算して光の速さが一秒間に凡そ三十萬キロメートル即七萬六千四百里なることを知りましたといふことであります。直吉や同級生にはこの説明が充分に了解なかつた、もう第一限の終りのベルが鳴つて休息時間が来た、皆ドヤ〜と校庭へ溢れ出た。

### 六、神経系遊覽記(その一)

大脳や小脳其他延髄や脊髄及び各神経を總稱して、神経系と申します、私は讀者とこれから急行列車で、この神経系統を遊覽せやうと思ふのですが、先づ出發に當りまして案内者としての私は、讀者の爲めに少々こゝに説明して置かねばならぬことがあります。それ

は外でもありません、これ等神経系の所在地のそれを説明致さうと思ふのです。さて私共が遊覽の第一歩を運ばんとする大脳府は何處でありますかと申しますと、この府は小脳府と共に頭の中、いや讀者驚いちやいけません、實際其所在地は我々の頭の中にあります、そうして小脳府から汽笛一聲、僅時の間汽車に揺られて下行致しますと、第三遊覽地たる延髄寺に着きます、私共一行はこゝの本堂で一泊致しまして、翌早朝ニギリ飯を腰にして脊髄寺峠を下る豫定です、脊髄寺峠はこれは全く胴にありますので、それから所謂各神経は全身にありますから、當低急行列車で急がねば二日間では充分勝地を探ることが困難だろうと思つてゐます。



大脳府で先づ讀者の御眼をとめて貫はねばならぬことは、城壁を  
 なしてゐる頭蓋骨です。支那の首府へゆきましても、或は巴里倫敦  
 の市街へ旅行しても、決して見ることの出来ない頭蓋骨の城壁は、  
 大脳府の郊外に築かれてあります。而もこの頭蓋骨の内側には、な  
 ほ三層の膜がありまして大脳を守つてゐる、その外部からの攻撃に  
 備へた有様は、クロンスタットの砲臺よりも堅固に讀者は見受けら  
 れるでせう。城壁を御覽になりましたら急ぐ旅路で御座いますから  
 足を早めまして市街を見物致しませう。大脳市は大體は御覽の通り  
 左右の兩半球にわかれてゐて、その表面にはごく亂脈な皺がありま  
 す、これは市街の面積をふやすため、なるだけ面積を大きくとれ  
 ば勢力が強いので作用がよく出来ます。讀者御覽なさい世中の馬鹿  
 息子や馬鹿野郎を、實際この大脳府の勢力が強いか弱いかにつて

その人の賢愚に關係するのであります、だから賢者の大脳には皺が  
 多くて、愚者の大脳には皺が少いのです、そうして讀者は外部をのみ  
 見て、灰白色だと思ひなさるだらうが、内部は白色でありますでこ  
 れを白質部、外部を灰白質部と申します。大脳に付ての説明はまだ  
 面白いことがあります、延髓寺への直行列車の發車に時間が通り  
 ましたから、これに乗込むことに致しまして、小脳は列車の窓に眺  
 めながら説明いたしませう。車掌が相圖の笛を吹きますと、何んだ  
 か小脳府へ飛んでゆきそうな氣もちが讀者いたしませんか。おやお  
 や随分速力を増したと見えまして、グラ／＼動くのでお尻が痛い  
 すね。

『あれです、あれです』大脳府と似てゐるでせう、質もやつぱり同  
 じいことなのです、そうして左右兩半球に分れてゐるでしよ、讀者



お覽なさい、あの外側の灰白質町が内側の白質町の中へはまりこんでゐる工合が、まるで樹の枝の様ではありませんか、おや早いものですね、もう延髓寺近くへまゐりました、これからだんく山道へかゝりますから、道路が細くなつてまゐりました、あれあそこに見えるのが延髓寺です、延髓寺と脊髄峠とのさかい目は、別にこれといふほどのことはないのですが、頭骨内の端に延髓寺があるものですから、頭骨内に有る部分だけを延髓寺の領分と申しますので、端の處が脊髄との境界線であります。

『延髓寺驛！ 延髓寺驛！』さあ讀者車掌に注意されぬ先に下車いたしませう、この列車は脊髄峠からは最大急行になるのですから、グヅグヅしてゐると眞夜中脊髄峠のトンネルを知らずに通過せなくてはなりません。

『延髓寺！ 讀者は寺といふ字を聞いて、やつぱり人間世間にありふれた、材木や煉瓦で作つた寺だと想像なされたのも無理はありません、せぬ、而し御覽の通りこの延髓寺は大脳府の下面にあつて、この圓柱状をなしてゐるものは、おもに神経纖維のあつまりから出來上つてゐますので、これが又種々の運動を致しますが、もう日も暮れかかりましたからこれ等のことは明日に延しまして、今晚は讀者とこの延髓寺の不思議寺に旅の疲勞を休めて、また明朝出發いたし脊髄峠の難所も通過して、最後に種々な神経の方へも廻らなければなりませんから………エヘンく。』

七、神経系遊覽記(その二)

空は漸うに明け放れてゆけば、赤う引く横雲がしだいぐに紫青



の色にとけ入つて、朝日がキラ／＼と輪廓あらはに、屋根の上にあ

しのぼれば、軒の雀子は時を得顔に呷やいてゐる。

『讀者、草靴の用意が宜しいですか』

これからが脊髄時、この管道をなしてゐるものは、讀者がかねて御存じの脊骨からできてゐますので、讀者の脊後を手で觸つて御覽なさい、脊中の中央のカタイ處がそれなんです、そうしてこの管道をみたしてゐるものが脊髄なんです、昨日御覽になつた延髓寺と同じ様なものが一ぱいつまつてゐます。これもやつぱり外部は白質と申しまして内部が灰白質なんです、この白質は大脳府の灰白質と連絡してゐます。そうしてこの骨髄時の餘派が神経と稱しまして、人間のからだの各部即手の先から足の指までも隅から隅まで分布して、丁度樹木の根の様で御座います。

『コレ／＼讀者、私の話ばかりに氣を取られて、この細い暗い道路を、そんなに脊後から押合つては危険い危険い……』

『おや／＼出口の薄明りが見えだしたぞ』

『そうじゃないかしらん？ 不思議ですね、讀者！ あれを御覽な

さい、火の玉がだん／＼こちらへ廻轉つて來る様ですね』

『オーイ』

『オ——イ』と火の玉の方からも叫ぶ聲がすると思つた刹那に、

火の玉はピシャ／＼と消えた。

『讀者／＼、お静かになさい、何んだか人聲の様なものが見えませんが、

それ、それ／＼』

『何だ！ 煙草の火か、馬鹿／＼しい、やつぱり遊覽隊の別動隊だ』

つまらぬことに時間を費しましたね、さあこれから出口の方へ急



ぎまじよ、どうも神経各部の方へ廻る時間が足りない様ですな。それでは私は案内者としての見致から、今迄遊覽した各方面の作用や運動に付て御話を申上げて、諸君の家苞苴といたしませう。

そこで一番初めに見物しました大脳と申します處は、精神の府、最高の中樞で、我々の言語動作思考の作用を司るので、その主となつて働く部分は例の灰白質なんで白質は灰白質の御弟子のようです。何せと申しますと、白質は他に命令を發しません、例へば『面白いお伽噺の本を探して来い』と灰白質が命令を出しますと白質はその命令を神経へ傳達だけです。又神経から来た報告例へば『只今蜂に刺されました』『蜂が手にとまつてゐます危険だ危険だ！』といふ注意もみな灰白質に傳達します。小脳府は大脳府と比較すると、ものを考へるなどいふことは少しも出来ません、唯器械の様でありまして

このものが私共の運動を調節する方だけはなれたもので、私の知つた或人の頭から小脳を切り取つたのを見たことがありましたが、其人は不思議に立つことも出来ず、歩くことも出来ず、手を働かすことも出来ず、横にころげたなりで數週間後に死んでしまつたことを記憶してゐます。

延髓寺とは多くの反射運動をつかさどるところでして、反射運動と申しますと大脳府から下る命令をまつてゐないで、種々の運動をすること、私共の呼吸することや心臓の搏動することや其他歩行すること、眼瞼を開閉すること、せきやくしやみこれ等のことは皆延髓寺の僧侶のさせるので、大脳の休日の日でもこれ等の反射運動がちゃんと出来ず。これは至つて便利なものでも若し私共人間がこの反射運動を司る延髓寺がなかつたとしたならば、夜になつて寢に付



いた時、大脳が又眠つてしまふから、私共は死んでゐなければなら  
ない筈ですのに、と思つたなら讀者は延髓寺のお伽噺大師を夢にも  
忘れてはなりません。ついでに脊髄は神経の末端にうけた刺激を腦  
へ傳へたり、神経を経て筋肉へ腦の命令を傳へたりしますが、また  
延髓に似て反射運動もします——その一例は——随分急いで御話  
したものですから、これ讀者御覽なさい私の顔の汗を、この汗は即  
脊髄の反射運動をするといふ實例であります……ヒヤ〜

### 八、神經子僧のいたづら

馬鹿〜しいな、神経〜つて無學な人間野郎が呼びやがつて、  
如何せ僕は神經子僧よ、貴様達の知つたことぢやない。無學の癖に  
神經子僧、神經子僧つて、そんなことを思つてゐるから、人間世界

には間違や狂人が多いのだ。僕を子僧呼ばはりして、その本名を問  
はれたら赤い顔をして汗をかくんだらう。

「何？ 知つてゐる？ これあ面白い！」

「ぢや腦神経様つて、幾何に分かれてゐる？」

「なんだつて、腦の下面から出てゐて都合十二對だつて、そうして  
其十二對の名がわからないつて」

だから僕は人間てえものは、氣に食はないのだ知らない者が多い  
癖に知つた風をして、はかりながら其一對は嗅神經、嗅さんとい  
ふのだ、物のにほひをかぎわけることが役目で、人間野郎は知らな  
いだが、御鼻の中に出張所を設けて、毎日働いてゐるのだ。それ  
から第二對は視神経つて視ちやんといふのだ、あんまり人間は威張  
から、このあいだも一人盲目にしてやつたと話してゐた、物や形や



色を見わけるので、人間は毎日どれだけ恩を受けてゐるかしれない程だ、その次の二對は人間の眼玉を働かして遊んでゐるんだ、これは極香氣で面白いそうだ。

第五對は實に三又だ、三本にわかれてゐる處から我々仲間では三又神経と云つてゐるが、上の一本はおもに眼窩に向ひ次の奴は上顎に出張してゐて、下の一本はおもに下顎に働いてゐます、人間は三度の食事には必ず上顎や下顎の御厄介になつてゐながら、まだ一度だつて御禮に來たこともないと云つて、時々おこつてゐます、だが第六對は眼球を動かすやつで第三第四の二對とは違つたことをするのですせ、第七對かねあれは人間の顔面に出張所を設けてゐて、各部の運動の分泌をつかさどつてゐるそうだ、僕はまだ一度も見廻つたことはないが、随分人間の爲には働いてゐるそうだ。第七對は聽

さん聽さんて、仲々氣輕な男で、聽神経といつて物の音を聞くので人間の耳の方へ行つてゐるのだ、僕も音楽や戦争談のある頃は、好んでその方へ遊びに行くが、面白いことは面白いね、けれど人間てえ奴はよほど不潔な奴と見えて、時々耳垢で臭くてたまらぬことがある。舌や咽頭に分布してゐて物の味を人間にしらせてやつたり、舌を動かしたりしてやるのは第九對で第十對は非常に勢力家で、何でも來いといふ風に、種々なことを司どつてゐるが、おもに肺や胃に居る處から肺胃神経と字名されてゐます。脊髄に副行してゐる神経、舌に分布してゐる神経等は十一十二對で、これ等が人間の頭や脊髄に住居してゐる、脳神経といふのだ『どうだ、わかつたか』なるほど人間は愚なものだ———こんなことがわからぬのか』こんなことを話してゐると電車通の向側の方で、

神經小僧のいたづら



『あつ、大變だ』

と誰か、今しも一人の女が髪をふり亂して、電車の窓から飛び出さうとしてゐる、他の乗客は屹度救ける考へなのだらう、其女の袂を掴へてゐる爲めに、頭がズル／＼とレールの側を引張られてゆく――

――神經子僧は今迄それが氣付なかつたのだ、これを見て驚いて馳せつけた。この危険な死の神が前に迫つてゐる女、その女は先刻から電車の中で氣が狂つたのだ。何故かといふと電車の中が餘り込み合つたものだから、女の頭の中に住居してゐる、今迄こゝに立話をしてゐたいたづら神經子僧は、ソツト女の頭から飛び出して、遊んでゐたものだから、そうして調子に乗つて餘りシヤベリつゞけて、歸ることを忘れたものだから、その女は狂人となつて電車の中を飛び出さうとしたのだ。

いたづら神經子僧が馳せつけた頃には、電車は停車して其危険に陥つた女を救けた。いたづら子僧は初めて知らぬ顔をして彼の女の頭の中へもぐり込んだ、おやく／＼耳の處から顔を出してゐるぞ。

九、手品つかひ

茶目吉はまうけられたテーブルを前にして、見物客のお隣の良さんや鈴子ちゃんや三郎君の大勢に向つて、これから取かからんとする、手品の説明をしてゐます。

『諸君、若し我輩がこのコップの水を一滴もこぼさずに、見事にこのコップをさかさまに致すことが出来たならば、諸君にとつて一層のおなぐさみだらうと信じます、サウシテ若し我輩が失敗なくこの手品を終ることが出来た時は、何卒拍手喝采を願ひます』



茶目吉君は手品がかねてから好きなものですから、手品つかひの言色までよくつかひます。

テーブルの上にはなみくくと水を盛りたるコップを置き、これに厚い紙をかぶせて、コップの中や紙の處に泡が少しも無いやうにしてあります。やがて茶目吉君はわざとらしき咳嗽をエヘン……エヘン……。手には一つの美しい塗盆を持つてゐます。茶目吉君は見物客の方へ一目を呉れまして、やおら其コップを静かに、もち上げまして、手にせる塗盆をコップの口の厚紙で覆ふてある上を、紙が盆にくつつかない様にしてコップの上へかさねました。この時見物客の眼は皆茶目吉君の手元へ注がれてゐます。茶目吉君は大得意でこのコップを彼の塗盆のまゝ倒きにいたしました。暫時おいて茶目吉君は静かに下になつてゐる盆をとりのけました。コップは水をいれた

まゝ倒さになつて、僅か例の厚紙一枚にさゝへられて、一滴だに下へこぼれないのです。この不思議なる手品には、初め半信半疑の見物客も、息をころして茶目吉君の手元をみつめてゐます。餘り茶目吉君の手際が好いのにみとれて、さては見物客は拍手喝采を忘れてゐます。

茶目吉諸君!!! 拍手喝采の程を……」

見物客の良さんや鈴さんや三郎君は、茶目吉君に注意されて拍手喝采「茶目吉君萬歳」とやつた見物人もあつた。茶目吉君は其聲のする方をジロリと白い眼でにらみ付けました、實際茶目吉といふのは俗名でほんとは宗吉といふのです。

茶目吉君は今度は長さ三尺ばかりのガラス管に水銀を一ぱい入れて、同じ水銀を盛つてある器とともにテーブルの上に運びました。



「諸君、前回の手品と同様に今度は水銀の手品をやつてお眼にかけます。御覽の通り一方の水銀の少しもない方の器へ、この水銀の入りたるガラス管を倒さに立つれば、決して水銀はこの管の中にとまらぬ。まづてゐませぬ、よく御眼をとめてもらいたい。」

「而し諸君、僕がこの水銀を管の中にとめることが出来たならば、これ又諸君のおなぐさみでしやう。」

「手品の結果よくゆきました時は拍手御喝采の程を！」

茶目吉君は今度は彼の水銀を盛りたる器の中へ、水銀を入れたガラス管を倒さに立てました、何と不思議ではありませぬか、さつき他の器に立てた時は水銀は管にとまらずに、器の中へ流れ出ましたのに、今度は管の上の方が少し空所ができたばかりで、水銀は美事に管の中にとまりました。

「宗吉君萬歳！ 萬歳！」 拍手喝采

茶目吉君の得意な顔は、何と形容の言葉を見出さない程です。

「諸君！ 何と不思議ではありませぬか。そこで私は只今演ました二回の手品に就て、この原理を少しく諸君にお話ししたいと思ひます、何方暫時御静聴を……」

「皆さんも御承知の如く、空氣といふものは目に見えないけれど力はなかく、強いものです。コップの水のこぼれないのも、ガラス管の水銀が管から出てしまはないのも——つまりこの空氣の力によるのであります——エヘン——空氣がコップの下から厚紙を押してゐるから水がこぼれないのです、空氣が器の中の水銀の面を壓してゐるから、管の水銀がさがらないのです、そうして空氣のこの力を空氣の壓力と申すのです。」



茶目吉君は今度は小川先生の態度をまねて、——先生はよくポケットに手を入れたながら生徒に向つて講義する癖があるので——茶目吉君も小さい洋服のポケットに手を入れたながら、さも今日はおとなしさうな顔付で、可愛らしい見物客に向つてお話しをしてゐます。時折隣室の鸚鵡はけたましましき聲で、茶目吉君の『みなさん』をまねて、ミナサン ミナサン。

### 一〇、愛犬の末路

夢吉が天にのぼらうといふ希望を懐いてから、今年で満三年になるのです。この頃になつてその希望がいよゝゝはたすことの出来る準備がとゝのひました。準備といふのは外でもありません。夢吉がこの志望を起してから

専心に軽気球の製造にとりかゝつたのですが、何分軽気球と一口に云つた所で、読者も御承知の如く馬鹿に大きいものですから、夢吉がいくら焦心つたところで、そんなに容易にできぬのでした。されど夢吉の三年間の苦心と努力は、なみたいていではありませぬ、その結果球の周囲が五間ほどの絹でこしらへた怪物の様なものが出来あがりしました。絹の目をふさぐにゴムなど使用いたしまして、なか／＼立派なものです。球の中には石炭瓦斯や水素瓦斯のような空気よりもつと軽い氣體を入れました、其上に丈夫な綱を懸けた處などは、近頃巴里や倫敦の空中を飛行しつゝある飛行機にまけない位です。綱の下部には籠をつるし、この籠の中へは夢吉とそうして夢吉の親友たるポチ君が乗り込む手筈なのであります。



今日は幸ひ飛行するには、また無き好天氣、春の日うらゝかに晴れ渡りて、空には一點の雲影だにありません。この平原十里は緑にもえ、葦の花紫に香ひて、青年飛行家夢吉君の門出を祝はつてゐるのです。やがて三年間の製作にかゝる夢吉の輕氣球は、數人の人夫に運ばれてこの野原に置かれました。そうして盛装した夢吉君とその遊び仲間のポチとは、父や母や近隣の人や友達仲間におくられて、輕氣球に乗り込みました。最初はこれを試みるために二十間ほどのぼりました。そのうちに球の上部の辨に着けた綱を引きますと、辨が開きまして瓦斯は逃げ出すので球はしなびる、そうして急に降り出しましたが、これの急降を防ぐ爲め、球の側面に備へられた、骨なしの蝙蝠傘がぱつと廣がりますと……またこれについてある綱によつて籠はつるされまして、ふはりくと靜かに見送人の

なかへ降りました。この試運轉をわき眼もふらず見物してゐました、見送人の面々はこの時『夢吉君萬歳!! 夢吉君の成功を祝す!!』と口々に叫びました。

夢吉はこの試運轉に成功したものですから、内心うれしくてたまりません、天へのぼるてふ志望を起してから三年餘の苦心努力、この苦心と努力を回顧すればするだけ、今日のこれからの愉快が想像されるので、人の言葉や兩親の注意も耳へはいらぬ位なのです。やがて最後の別離を兩親や兄弟や近隣の人におしみました、ずん／＼空中へ昇りました時は、少なからず心寂しくなりましたが、それも束の間でした、かたへのポチはと見るとサモ面白さうに下界を眺めてゐるので、何時の間にか別離の寂しきも消えうせてしまいました。下界に居る時はひばりの空高く囀るのを聞いて、何處に居るのか見



定めやうとしても、餘り高く飛んでゐるので其形が見へぬ位でした、そのひばりの囀る聲も、耳をすまして見ればズット輕氣球よりも下の方に聞えます。見送の人々はと見おろせば、もう形も顔も見えませぬ、唯見るものは野末の緑一面の色彩や、黒青い森や山、野面を流る、川ばかりです。それも五分と過ぎ二十分と過ぎるに従つて、その形態がだん／＼縮少してゆくのです。

虚空へ昇るに従つて、風が出てきました、籠が左右に動揺します、ポチは恐ろしそくに身を縮めてゐます。夢吉は籠の中で思ひました、「何處から天といふのだらう？ 早く天へといきたいな……」夢吉がかねてより思つてゐましたのは、天といふものは下界で見て天氣の好い時は、青い青い海原のやうに見える、あそこが天といふので、きつとあそこには青いガラス張りの厚い境があるのだらう、その上

には種々の天の神様や、地球の上で見ることの出来ないものがたくさんあるだらうと思つてゐました。而し夢吉のこの考へはたいへん間違つた考へでした。天にのぼると申しては星の世界にまでも、行かれる様に聞えますが、今日の飛行機や夢吉の輕氣球は、空氣の浮力を利用したものですから、空氣のある限りにしか空中へのぼられません、たとへ空氣があまりなくても、上にのぼるとだん／＼と稀薄なつてきますから、浮力も弱くなつてきます、浮力が弱くなつてくればいくら輕氣をつめこんでも、籠や人や其他砂などを乗せてゐるので、その全體の平均重量が空氣より重くなりますから、それである高さまでしかのぼらなくなるのです。今までの例では四五里位のものでしやう。

夢吉はこんなことは經驗が無いものですから少しも知りませぬ、



空氣は星や月や地球や天體のすべてのものを包んでゐるものだと思つてゐたのでした。風が出てきたのと氣球がいまゝでの速力でのぼらぬので、ポチとふたりで焦心てゐます、『何うしたんだらう、氣球に穴でもできたのかしらん』とひとりごちながら、籠にかねて積み込んでゐる砂を空中へ少しづつ棄てました、けれども氣球はもう昇りませぬ、風の爲めに横へくと飛ぶだけなのです。最後の土砂を籠から棄てました時に、夢吉は急にめまひを感じました、何とも云へぬ苦しいと思つたが籠の中へ打倒れてしまひました、そうして鼻からはおびたい血を吐いてゐます。これを見たポチは死物狂ひに叫んで、この若い主人のそばをはなれません——やがてポチの叫び聲は悲哀の聲にかはりました、そうしてかなしそうに若い主人の顔をながめては、その赤い舌で出血おびたい主人の鼻のあた

りをなめては、また空に向つて悲しい聲で叫んでゐます。

ポチの若主人夢吉は死んだのか生きてゐるのか、籠の中に打たほれたまゝなのです。ポチがかねて夢吉が降下する時——下の人に投げ付けてその繩を下の人に引いてもらつて安全な處へ降りる——ポチが其繩を見付けたのはそれからまだ數時間の後でありました。救助繩は籠の側からポチの働きて下界の方へ投げられました。けれども其救助繩の一端は下界へはまだはるかにへだゝつてゐました、ポチの悲しい叫び聲も、もうかれゝになりませんでした。

翌朝平原からほど遠い湖水の中に、この輕氣球を見出しました。そうして青年飛行家夢吉君と忠實な彼のポチは、籠の中に眠るが如く死んでゐたさうです。



一一 羊追ふ笛

美しく緑もえ、ひばりの囀りほがらかな野に、羊追ふ姉妹が住んでゐました。

この二人の哀れなみなし兒は、東雲の朝より星あかるき夕べおそくまで、羊の群を相手にして、その日くを暮してゐました。妹の綾子は羊追ふ笛を吹くことが巧手で、それが得意の一つでした。姉の春子はこの笛の音に合せて涼しい清い聲をはりあげながら一緒に歌ふのが得意でありました。そうして姉妹が夕べ淋しく父母を思ふ時は必ず、この笛とこの歌とで忘れやうとつとめるのでありました。夕べの戸張漸く垂れんとする時、この野末を通る何人にも、彼の唳らかな笛の音の、静かな廣い夕暮の野面に聞え渡るを聞いて、思

はずも急ぐ足を停めて、調子面白き歌に耳をすますでありません。そうして家路へ歸ることを忘れて、この笛の音歌の聲を目當にこの野をさまよふであります。この笛の音歌の聲はとある丘の上に立つて、今しも西のはてにうすづかんとする燃えるやうな夕陽をながめながら吹きすすさんでゐるのです。

『わたしのお父様は、どうなさつたのでせう』『ほんとに、私のお母さんはどうなさつたのでせう』

姉妹は自分たちの両親の顔を知らぬのでした。そうして何時両親が亡くなつたことすら知らぬのでした。そうしていつとなしに両親は、あの高いく大空の輝く星様の中においでになるのだと思つてゐました。



今宵もふたりは更けゆく野面に立つて、キラ／＼と輝く幾百萬の  
 數知れぬ星を仰いで、兩親のゆくへにあこがれてゐます。「お父様の  
 星はどれでせうか」妹の綾が悲しい聲で姉にはなしかけますと、「お  
 母様のお星はどれでせう」と姉の春もうちまどふのでした。  
 「父様の星も母様の星も、なせうなづいて下さらないのでせう、な  
 せ招いて下さらないでせう……」ふたりはこう云つて、さめ／＼と  
 泣きだしました。姉妹は手をとつて泣いてゐましたが、やがて姉の  
 春子は涙をおさめまして「綾ちゃん、綾ちゃん、かうして毎晩父様  
 や母様のゆくへを捜すけれど、一向私共の心が父様や母様に通じな  
 いとみえて、うなづいても下さらなければ、招いても下さらない、  
 こうしてゐても唯毎日泣いてゐるばかりだから、一層私はこれから  
 星の世界へ上つて行つて、戀しいなつかしい父様や母様を、尋ねだ

して來やうと思ふが、さぞその間は綾ちゃんも淋しからうけれど、  
 ひとりで待つてゐて下さいな——ね綾ちゃん」  
 「アラ姉さん私ひとりで淋しくて厭だわ、ソソソナことを云はな  
 いで、私もいつしよに連れていつて頂戴な？」よ／＼とばかり姉の袂  
 にすがりついて泣き沈むのです。  
 「だつてね綾ちゃんはまだ年がゆかないから、足が弱くて姉さんと  
 連立つて歩けないでせう、それでね姉さんはね、父様や母様が知れ  
 たなら、すぐに綾ちゃんのところへ歸つて來ますからね、そのかわり姉  
 さんはこんな不思議なものを、昨夜神様から夢に頂戴いたの——」  
 と姉の春子が懐中よりとりだすものを見れば、不思議な硝子でこし  
 らへた、參角形の五寸程の長さのものです。

「これはね、三綾硝子といふものよ、昨夜神様から教へてもらつた



の、綾ちゃんや姉さんは太陽の光を白色だと思つてゐたでせう、處  
がその實はね、色々光線が集まつてゐるので、この三稜硝子を光の  
来る方へ向けて、暗い處へうつすと、美しい紫や紺や青、緑、黄、樺、赤の  
七色を出すのですつて。』

『これを私がつてゆきますから、今頃はどこに居るか雨のふる日  
や、暗い日はすぐ綾ちゃんにわかつてよ、その時は綾ちゃんも、き  
つと羊の笛を吹きならしてね、いつもこの野へ来て吹いて頂戴な、  
その時は私もきつと美しい七色をだして何處にゐるか知らせてよ—  
ね綾ちゃんいゝでせう！』初めは厭だくと云ひましたが、根  
が柔順しい綾子ですから、段々説ききかせますと、

『そんなら、父様や母様が知れたなら、綾子を連れに、すぐに歸つ  
て来て頂戴よ。』

『え、直ぐに歸りますとも、綾ちゃんもきつと羊の笛を吹くことを  
忘れないでね待つてゐて下さいよ。』

旅の門出の離別に姉妹は歌ひました、笛の音歌の聲、さやくと  
野面を渡つて、菜種の花に眠る蝶や、麥の穂に横はれるひばりの雛  
を驚かしました。そうして、姉の春子はその夜天の國へと旅立ちま  
した。

雨の降る日、雨上りの時、空に半圓形をえがいては美しい色の虹  
がたちます。妹の綾子はきつとこの時この美しい虹の消えうせるま  
で、野の丘の上に立つて、羊の笛を吹くのでした。『姉様早く歸つて  
頂戴な』羊の笛に無限のなさけをこめて吹きすさびました。そうし  
てその虹の消えうせた後は、物狂はしげに叫びながら、野や丘や森



を駈けめぐりました。綾子のなつかしい父様も母様も姉様もそれきり天より歸つて來ないのです。折々虹こそたちますが風のたよりもおとづれもありませぬ。

讀者が雨上りの時、雨ふらんとする時、天の一方にいまでもみることのできる虹は、水滴が三稜硝子と同じ功用をなして、太陽の光線を屈折分解するのでありまして、たまには彼の羊追ふ姉の春子の三稜硝子によることもあるといふ話です——この時は綾子はやはり野に出で、美しかった頬は褪せ、髪はみだれて見るも物哀れな姿を丘の上に、彼の羊の笛吹きならずといふことであります。

### 一二、山の魔石

ふたりで一番高い山の巔まで案内者の老人と探險家の英次とは登

つてゆきました。老人は數分間は餘り草臥れてものを言ふことが出來ませんでした。とうとう山の魔石の話をかたり出しました。

「私が山の魔石に相遇つたのは、まだ餘り古い事でもございません、私は不斷倅共——そうです丁度あなた程の年齢でございませう——

——を連れて、たき木を集めによくこの山へ來たものです、さうしてこんな草臥れる事がございませんでした。それが大約二年も前のこと、或日倅共が家に用事がございまして、連れてきませんでした。その日は思ひの外おそくなりましたして、御覽なさい向ふのあの谷間でございます、急いでその細道を通りぬけやうと致しますと、何とも云へぬ不思議な妙な目に逢つたのでございますよ。たぶんどんな人でも私より前にあんな目に逢つた人はございませぬ、よしやあつたとしましても、そんな人は生き残つてゐないでせうから、



私がいまあなたに話す如く人に話してきかしたことはございませぬ。急いで通りかゝつたその時でした、腰には薪を切るための大斧をさしてゐました、その大斧がどうしたはずみか、谷間の樹の枝に懸つたので、私は思はずよろめきたふれました。その時でした、魔ものでせう私の腰のあたりをつかみまして、ズル／＼ズル／＼と岩間と云はず樹根と云はず引いてゆくのです、もう其時は聲も出ませんでした。今死ぬか今死ぬかと思つて氣を痛めましたので、體も元氣も臺なしにしてしまいました。私の髪の毛は黒い光澤のある毛であつたのが、たつた其夜一晩で白髪になつてしまつたのでございませぬ。その時手足も弱くなり神経も駄目になつてしまひました。今でも少し骨を折れば、手足が顫へたり、ふいと物の影なんぞを見て肝を潰したりする程に、わたくしの元氣が無くなつてしまつたのでござい

ます。はなしがわきへそれましたが、私は死んだ氣になつて眼をつぶつてゐますと、そのまゝドツカリと石の側へ投げ出されました。投げ出されたのでふと眼を開けて見ますと、あれが魔石とか申しませう、大きな二抱へもあらうと云ふ黒い石なんです、ふと見ると何時の間にか私の腰の大斧の柄が折れて、頭の斧の所だけ石の上に吸ひ着いてゐます。これを見た私は脊中へ水を注ぎかけられる様に、寒氣がして來まして、齒の根が合はない程身震がしてしますが、勇氣を鼓舞して驅け出しました、不思議ではありませぬか、それまでいくら焦心たつて身體の自由が少しもきかなかつたのが、急に身輕になつて夢中になつて、この山の巔まで來ましたことだけは知つて居ますが、それから昏睡に陥いつてしまいました。翌朝倅共に救けられまして山を下りました。いまでもこの巔からあの谷の所を見下



しますと、わたくしは眩暈がしそうになるのでございます。』  
老人はこの話が終りますと、英次の呼び止めるのも知らぬ振で、  
サツサと山を下つて行くのでした。

英次はこの話を聞いて恐怖よりもむしろ愉快でした。これはきつ  
と天然磁石にちがいないだらうと思ひました。人工磁石は時計の鎖  
などにも下つてゐるので、よく知つてゐます、磁鐵鑛を鋼鐵にこす  
りつけたり、また電氣を働かしたりして、こしらへた棒状のものや、  
馬蹄形のものや、磁石針が必ず南北を指すことや、航海者が神様の  
やうに尊ぶ羅針盤も、學校で磁石を習つた時に見て知つてゐます。  
けれども彼の老人の相遇した魔石、きつと磁鐵鑛に違いない、そん  
な大きい魔石は是非見たくてたまらない。

案内者としてたのんだ老人は歸つてしまつた。英次はその谷の方

を見おろすと、何んだか鬼の頭でも取つた様に愉快でたまらない。

『獨行！ 獨立獨行』こう叫んで、種々の試験石を入れた、箱を肩  
にして、谷又谷を下り初めました。老人の相遇した山の魔石は、ど  
の谷であつたのでせう、英次は血眼になつて、谷又谷、岩又岩の間  
を探しました。けれども如何しても見當らないのでした、英次は谷  
や岩の間を今猶探し廻つて居るてふことであります。

### 一三、不思議の溜池

マネキチ君とハネコ嬢は椽側の處で電車ごつこをして遊んでゐま  
した、そこへ丁度交換局の印半天を着た工夫が「御免なさい」と遠  
慮なくはいつて來ました、マネキチ君は好かない顔の奴が來たと思  
つて、その男が何をするか見てゐました。ハネコ嬢もお母さんから



聞いた盗人ではあるまいかと内々心配しながら見てゐました。其男は椽側の側のお父さんが大切にしておつて使つてゐて、自分等には少しも觸らせても呉れない、それほど大切なデルビル式の交換電話の背面板の内から、丸形の硝子の様な瓶を持ち出しました。ハネコは若しこの男がこれを持つて逃げ様としたら、直ぐと茶の間に御客様と話しをしてゐらつしやる、母様に注進しやうと待ちかまへてゐると、くだんの男はその硝子瓶を沓脱石の處へ置き去りにして、臺所口の方へゆきました。

二人は不思議さうに其跡を見守つてゐると、やがて臺所用の古ぼけたバケツを持つて來ました、さうして沓脱石の上へ据ゑて、その硝子瓶の中の物を出していぢつてゐます。工夫はさも物珍らしげに、無邪氣な顔をしてゐる二人の子供を見

て、ニヤリと笑つたまま眞面目に黙つて、其外瓶の中の藥液を棄てて、しんきに砕いた白い粉末を入れて、その中へ水を注しました。さつき硝子瓶の中から取出して置いた、鉛の丸棒に似たものと、素焼の丸い筒とを、この水を七分目程注しました硝子瓶の中へ再び入れましたが、何思つたか一寸舌打して急に鉛の棒だけ取出して、小刀の尖でガチリ〜と削り始めました。やがてその金の面をピカピカ光る迄に擦つて、再びこれを硝子瓶の中へ入れました。そして二つとも掃除を終つて、元の背面板の中へ納め、電話の線をすつかり接けて了ふと、工夫はお父さんの眞似をして、電話器の把手を廻して、磁石電鈴をチリン〜と鳴らし、直ぐに交換手と話をして、

「ア、モシ〜 ア、モシ〜……。」 「四百三十七番……。」

マネキチとハネコは顔を見合せてニコツリと笑つた。



工夫はスタコラ急いで門の方へ出て行つたのを見送つた二人は、お父さんの留守を幸ひ工夫のマネをやらうと相談いたしました。やがてマネキチは書生部屋から脚榻を取出してきました、ハネコは臺所からバケツを持つてまいりました。

「兄さん、脚榻で背面板へといいて」

「大丈夫だ、うまいぞ。おい、ハネコお前下へ来て、僕が出すから椽側へ音のせぬ様に置け……」

やがて二人は工夫のやつた様に硝子瓶を取り出しました、鉛の丸棒も素焼の筒も椽先へ取出して、硝子瓶の中の薬品をハネコが袂で、ひつくりかへして庭へこぼしてしまいました。こんな風にして取出して見たものゝ、そんなに面白いものではない、やつぱり電車ごつこの方が面白い。それにハネコは袂で薬品をひつくりかへしたこと

で、マネキチに小言を食つたので「お母さんに言つけてやるは」と言つて茶の間の方へ馳けだしました。マネキチはお母さんに見附られては一大事と急いで元の如くなほしました、けれども薬液が無い、ごまかしに手洗鉢の水を注ぎ込んで、背面板の中へ納め様としました。

折柄俵の音がして、父様のお歸らしい、「父様お歸り……」といふハネコの聲が玄關に聞えます。「兄さんが電話をこわしてよ」といふ様にハネコの父様に何か言つてゐるのが、マネキチの耳へはそう聞えます。

そのうちにお父様が書齋にはいつて來なさるらしい、マネキチは小さくなつて脚榻の影にかくれてゐると、とうとうお父様に見附られました。



『マネキチ、マネキチ』別段變つてゐない、普通のやさしい聲だ、マネキチは呼ばれたので、ハイと返事をしながら脚榻の影から顔を出してみると、お父様も母様もハネコも椽側に立つて、自分の顔をながめながらニツコリ笑つて居られる。『マネキチ、お前は少し大きくなつてもつと勉強したら、そんな真似をしてもよいが、電氣の書物もならはないで、そんなまねをしてはなりません……』この時の父様の聲はやさしい聲ではなかつた。

『私父様がお歸になつたら、あの丸い硝子瓶の名を聞きたいと思つてゐたのよ——そうするとね、兄さんがあれを引ぱり出したのよ』とハネコは罪をマネキチ獨りに負はさうとしてゐる。『いえ……』とマネキチは言譯をなさうとしたが『フ、ーンあれかい、あれは電池といふものだよ、電氣の溜池の様なものだ』

『ゑ、不思議な溜池ね……』

『あの中に鉛の棒があるでしやう、あれは亞鉛棒といふものだ、それから軽い素焼の筒は中にマンガンの粉末と、炭素の粉末と、板の様にした炭素の塊が入つてゐます。それから工夫が入れた白い粉末と云ふのは、鹽化アンモニヤといふお樂、それに水を注すと電氣の溜池が出来上ります、ハネコには分らないだらう、どうだマネキチ……』

『ハイわかりました』『それなら電氣つて、どうして起るのです』とマネキチは脚榻の影から這ひ出しまして、父様に問ひかけました。『随分むづかしい事を問ふね、それはお話ししたつてお前達にはわからない、あの亞鉛棒の先に細い針金があるでせう、素焼瓶の方にあります、この針金は銅の針金です、この二つの針金の先をまと』



めて、其結目を舌にあてゝみると何とも云へぬ、清々しい天氣の味がします、これで電氣が起つたのです』

『電池には色々名があります、レクランシーだとか、センセンとか、お前達が大きくなつて電氣の書を調べると、種々の不思議なことに出遇ふだらう、だからしつかり勉強せなくてはいけない、これマネキチ分かつたか』その不思議なことつて何』ハネコは父様の顔を見乍ら、不審な顔付でこう問ひかけた。

『これからお父様は外出の時間だからお母様に御願してお話してもらひなさい。』

一四、野邊の別れ

秋もだん／＼深くなりました。曉の霜白く野末に置きて、鳴く蟲

の聲さへ、秋の哀れを語るが如くです。冬が来る!! これほど秋の野にとりて悲哀の現象はないのです、蝶も死ねば鈴蟲も斃れて、それは／＼何とも云へぬ寂寥が、野面に廣がつて來るのです。

この秋の末で午後の日脚が、西の野末に落ちゆかんとする頃でした、この秋の野を賑してゐた、萩、尾花、葛、瞿麥、女郎花、藤袴、桔梗といふ秋の七草の面々が、秋の別離の宴を催しました。居残つてゐた蝶や鈴蟲や蟋蟀の連中までこれに加はり、なか／＼盛大な宴會となりました。この時、桔梗の發起で、『みなさん、私はこの秋と別離るに當つて、これまで永い月日の間、七草よ可愛七草よと、何れの人々にも可愛がられました。私はその御禮として、私共の身上話をして、世の中の人々に聞かせてあげたら如何でせうか、諸君の御考へは如何です』賛成々々。



満堂一致で賛成しましたので、いよくこの重任を尾花にまかす  
 ことになりました。で尾花は「いよく、この重任を尾花にまかす  
 さん、はい私の葉は三つの小葉で、花は豆や藤と同じ蝶形花冠で、赤  
 白の二種あります。昔は胡枝子とか和皿丹とか申したさうで、私の  
 葉は茶の代用となるさうで、牛馬の飼料ともなり莖は筆の軸ともな  
 り、引馬萩の名が高いさうでございます。葛さん、私は萩さんと同  
 じく荳科に属する宿根草で、莖は蔓状で長くこんな延びてゐます、  
 三つの葉から出来てゐて圓くて先が尖つてゐます、八月の頃葉の腋  
 から三四寸の穂状の花莖が出て、これに赤紫の花を點々と付けるの  
 で、豆に似た莢ができますよ。葛粉は私の根から取るので葛根湯と  
 いふ薬ともなり、つるは葛繩となるさうで、此頃葛布といふ帷子の  
 材料がとれるさうでございます。瞿麥さん、「尾花さん私は御承知の

如く、撫子、又は大和撫子とよばれまして、花辨は五つ縁は細かに  
 切つてあります、私は自分から申すも心苦しいが、秋に咲く花の中  
 で一番可愛と申されて、人々の栽培して下さるお蔭で、この頃は隨  
 分仲間が出来まして、つきあいが張つて……」  
 漢名を敗醬と申します、莖の香が腐れた醬油の様ださうです、敗醬  
 科の宿根草で、春に芽を出して秋になつて粟粒の様な細かな黄花を  
 多く付けます。實は三四尺の丈ですが、尾花さんと一緒だと五尺も  
 六尺も延びることがあります、アハ、何分これからは尾花さん何  
 卒よろしく。桔梗さん、七草の中でも一番花の大きいのは私だけ  
 す、花の形は御承知の如く合辨花冠で、紫色で尖が五ツに分れてゐ  
 ます。藤袴さん、ハイ私は菊科に属するもので、やつぱり宿根草な  
 んでございます、花は多く簇つて咲き、色は普通淡紫色で中には白



いものもありません。何處に見處の無い私が皆様の御仲間入りは、形  
身が狭いやうに思ひますが、それとも香りの高いので人様に可愛が  
られるのでございませうか。

そこで最後に尾花が自分のことを、手帳に次の様に書き記るしま  
した。尾花とは申せ實は薄の穂に出たもので、獸の尾に似てゐる所  
から、こんな名前が付きました、葉は平行脈で其縁には極めて細か  
な、鋸齒があります。私の花は如何にも小さくて、學問上では小穂  
と申すもの、毎節に一つ宛並んで、長いのと短いのがあり、さう  
して其多くの小穂が集つて尾花が出来て居ます、この小穂の莖には、  
絹の如き柔かな毛が御座いますが、全く私の白く見ゆるのは、この  
毛があるからです。

尾花はこの重任を負ふたので、人が野道を通れば、必ず手を上げ

て招きます、みなさんはこの尾花の招くのを見て、風の爲めと思つ  
ておゐでになるでせう、けれど一度尾花の招くもとへ近づつて、そ  
のさゝやきを聞きなさい、尾花にサヤ／＼と秋の離別の身上話をす  
るであります。

### 一五、凸坊の日記

八月一日、午前五時起床、顔を洗つてから庭へ出てみると、夕べ  
見つけて置いた、朝顔の花が咲きかけてゐました、アラと思つて見  
てゐるとポロリ／＼と音を立て、朝顔の花辨が開きました。僕は  
面白くて一心に見てゐるとお金の奴が、何時の間にか僕の背後に廻  
つてワツと云つておどかした、けれど僕は驚かなかつた。御飯だと  
云つてよびに来たのだといふから、しかたなしに僕はうちへ入つた



妹のお花は僕が入つた時、漸く母様に起されて目をこすり〜起き  
て来た。

晝飯を食べてから、叔父さんの家へ遊びに行きました。庭の櫻の  
木の下で時ちやんと遊んでみると、向ふの垣根の方に赤いものがみ  
えたので、飛んで行つて取つて見た、蟲の死がらだづた不思議な形  
をしてゐる、いくら考へてみても何といふ蟲だか僕にはわからな  
つて、考へやうと思つてゐると、あやにく櫻の枝の處へ蟬が二疋來  
て、ジイ〜と鳴くので騒々しくて考へられなかつた。丁度そこへ  
藤井先生が庭を見に叔父さんにつれだつて來られた。僕は不思議な  
蟲の死がらを出して、藤井先生に見せました。藤井先生は蟬のから  
だとおしへて呉れた。叔父さんが植木をいぢつてゐる間に僕は藤井  
先生をつかまへて種々なことを聞いてやつた。蟬は何處で鳴くかと

僕が聞いたら、胸と腹との境の辨膜が振動して、あんな高い調子の  
聲を出すのだと藤井先生は云はれた、だつて胸や腹で人間は泣きま  
せんで動物も口で鳴くのでせうと云つたら藤井先生は笑つて居られ  
た。まだ藤井先生のおしへて呉れた事を忘れてゐた、そうだ蟬は雄  
ばかり鳴くので、雌の方は黙つてゐるのだつて、こんなことは僕は  
藤井先生より教はらなくても、毎日蟬取りに時ちやんと二人で出掛  
けるからよく知つてゐるのだ。

藤井先生が孵化するつて、孵化つてどんなことか僕は知らなかつ  
た、雌の蟬の様にだまつてゐたら藤井先生は蟬の話ばかり熱心に云  
つて呉れるのだ、僕はこれよりお伽噺の方が面白いと思つてゐたが、  
だまつて聞いてゐた。

雌が木の幹に卵子産み付けて死ぬのだつて、それが孵化して蛆と







いろ／＼な談話が起りました、なかでも鯛は雄辨家ですから、な

かなか面白いはなしをいたしました。  
『満場の諸君、我輩は今日の會合に諸君が擧つて御集會下されたこ  
とを深く感謝致します。こゝに數分間諸君の御耳を煩したのでご  
ざいます。さて諸君、世の中の進歩にともなひまして、我々魚類社  
會に於ても、種々な發明や發見がありましたことは、私が今こゝで  
駄辨を弄するの必要はないのでございます。』

『處が一步我々社會を離れて、人間社會の極めて最近の状態を見ま  
するに、甚だ驚く可くまた我々にとつて甚だ遺憾な事實が現出して  
ゐるのでございます。この我々にとつて最も残念なる事實は、何で  
あるか諸君の想像は如何でございませう。

彼のヨーロッパ、アジア、アメリカの空中をござらんさい。諸君

はそこに何物をか認めるでございませう、飛行機、飛行機、諸君は  
これを見て如何の感想を抱かれますか、我輩はこれを思ふに至つて  
涙潜然としてくだるを禁じ得ないのであります。』ヒヤ／＼

私共は彼の輕氣球の發見された頃、只今我々が抱く處の感慨と同  
様の感想を抱きました、彼の飛行機たるや何です、輕氣球の進歩よ  
り得來たつたものに外ならんではありませんか。而もその輕氣球た  
るや、そのもとを訂せば即ち我々魚類の腹中に在る氣囊から考へ出  
したものではありませんか、僕等が海水の中を自由に昇降するのを  
見て、これから考へだしたのではありませんか、さうして我々に一  
言のことわりもなく、發明だとか新發見だとか自分勝手な熱を吹い  
てゐる、諸君がこれを見これを聞きて何等の感じも起らないのです  
か、諸君は大平を謳歌してゐる間に、人間社會のかけはなれた進歩



は猶この飛行機の一事のみでないのです。遠洋漁業、捕鯨會社、我が社會の爲少なからず恐怖しました、これ等のことは、既に過去の夢とならんとしつゝあるのです。新しき機械巧妙なる手段、日に月に進歩しつゝ、我々の社會を破壊せんと勉めつゝあるのではありませんか。

我々は水中に住んでゐる、人間は空氣で生きてゐる、水と空氣、諸君は水と空氣との差を持つてゐる人間と我々との間に、さほどかにはなれた差を持つてゐると、夢想しつゝあるのですか、諸君よ諸君、今や其夢想から覺醒の時が來つゝあるのです。人間は空氣を以て生きてゐる、その空氣たるや酸素と窒素と僅かのアルゴンより成つてゐるのです、人間はそのうちの酸素を取つて生きてゐるではありませんか。空氣のうちには夾雜物がある、(水蒸氣 炭酸瓦斯 塵埃)

けれども人間は決してこんなもので生きてゐるのではない。而して水の成分は何です、水の電氣分折で以て水素と酸素とより成りてゐることは既に我々の知つてゐる處ではありませんか、普通の水には空氣や炭酸石灰や塵埃や鹽分を含んでゐる、けれども我々の必要とする處のものは何です、酸素ではありませんか。人間も我々も同様に酸素を吸つてこの世の中に生存してゐるのです。同様に酸素を吸つてゐる生物ではありませんか。而るに我々社會の現今の有様、諸君は既に覺醒の過去に屬してゐることをみとめつゝあるや否や、我輩は人間社會の日に月に時に秒に進歩發展して止む事なきを思ふ時は、實に云ひしれぬ感慨にうたれるのであります、諸君諸君の前には唯覺醒の二字のみではありませんか。』

この悲惨なる演説は萬堂をして、水をうつたる如く靜かにさせま



した。雄辨家としてかつ先覺者としての鯛君は、汗をふきながら壇を下りました。この日の會合に決議として定められたことは、種々ありましたそのなかでも我々が注意すべき事は、水城の建設であります。水城、何と不思議な城ではありませぬか。著者は題を改めてこれを御話し致しませう。

### 一七、海底の無線電信

海底の會合が終つてから數ヶ月の後のことでした。鯛君の慷慨悲憤の演説に動かされました魚類社會は、いよいよ海底に水城を建設することになりました。從來數ヶ月夜と云はず晝と云はず、工事を急ぎましたものですからとうとう水城が出来上りました。水城！何と不思議な城ではありませぬか。著者はこの水城を見んとかねて

著者が愛してゐる大龜を呼び、酒をふるまいましてこの事を語りますと、大龜は酒氣元でこゝろ能く承知いたしました。翌朝著者は潜水衣をきて海岸に待つてゐますと、大龜は波の間から現はれて來まして、その背に乗れと云ひますので、進むるまゝに其背に乗りまして海底深く沈みました。前途の方向が眞暗で少しも見えませぬ、かねて準備して來た懐中電燈を取り出しまして、これで暗を照しながら進みました。

いくら進んで行きましても、水城らしいものは見當りません、それに海底深く沈んでゆけば行く程、水が冷たくなつて來て、手足がちひむくらるです。暗さは暗らし、加之に水が冷いには著者も殆んど困却しました。けれども唯何物も認めないで、引返すといふは、皆者へ對しても申譯がありません。勇氣を鼓して進みました、ふと



この時潜水衣の袖が、樹の枝の様なものに觸れました。とたんに今まで暗黒の世界が、電光まばゆき光の世界と變りました。大龜と著者との驚嘆は申上ぐる迄もありません。讀者の御推量にまかせて置ます。この不可思議の變化に膽をぬかれました大龜と著者は、ヒツタリとそこへ棒立になつたまゝ、惚然としてゐますと、戦時服を着けた數知れぬ魚類が著者どもの周圍をとりまきました。この時でした著者どもは捕虜になつてしまひましたのです。

引きたてられまして、いよゝ、彼の水城の中へともなはれました。海草の莽々と生ひ茂つた、深い深い水底に屹然と聳えてゐる水城、これを見た時の喜びは、他にたとふるものがない位です、けれどもこの喜びも囚はれたる我身を回顧ると、春の雪の様に消え失せてしまふのでした。

やがて鐵の柱、重々しき鐵の扉、薄暗き鐵の窓、これだけ書けば讀者には、如何なる室なるかを想像し給ふでせう、著者どもはこの檻の中に投せられたのです。手に一ツの武器をも持たないのです。見廻せば鐵の壁、鐵の屋根、もう運命の神にすがりて機會を待つより他に何等のただても無いのです。

更けゆく海底の夜、きこゆるものは波の音、波の叫びだけなのです。著者はこうなつては益々神経がたかぶつて來て、匣を枕に鐵窓の夢はむすばれないのです。何うしてこゝを逃げ出さう、何うしてこの鐵窓を破らうか、こんな考へが、いろゝゝ起つて來て、立つてみたりねて見たり座つて見たりして、時を過ごしていました。耳をすませば時計が十二時を報じたらしい、かすかに鈴の音が聞えまして、獨耳をすましてゐると、この室の扉に近い所で盛んに呼び鈴が



鳴つてゐます。さてはと思つて扉の隙からのぞいてみると、城内の通信係らしいものが電信を受けてゐる處なのです。而も海底の無線電信、驚くではありませぬか、陸上や海上の無線電信ならば讀者も充分御承知でせう。電氣と云ふものは一體何物だといふことが、今日まだよく我々人間にわかつたとは斷言できませんのに、彼等の世界に海底の無線電信あることを眼前に見た、著者の驚きはどんなでしたらう、兎に角熱や光の輻射と同様に、エーテルが振動してその波がひろがるのだといふことで、これが電氣の波といふのだらふことから、明治の三十年頃イタリアのマルコニーといふ人が無線電信を實地に研究して、今日では軍事上に用ひる様になつてゐる、軍艦から陸上、陸上と軍艦、こんな風に無線で通信が出来るので、便利この上もないものだと思つてゐました。處がこの鐵窓の下で海底の

無線電信を見て、人間の世界はまだ一進歩すべき餘地が、たくさんあることを、つくづくと感じました。みなさんも御承知の如く、我々人間界の無線電信の構造は、つまり發信機の方に電氣の波を起す仕掛があつて、この波は随意的な時間だけの波を起すことが出来ることは、既にみなさんは普通の電信で御存じの筈です。するとこの波は四方八方にひろがり、相手の方の受信機にきつとふれます。この受信機にはアンテナといふものをそなへつけてあることは御存じでせう、このアンテナはその波を能く感ずるものです。そうして無線電信でも電氣を起すには、やはり電池を用ひ、これをコイルに連ねて、力を強くします、電鈴の鉦を御存じでせう、あの鉦をおして電流を通じた様に、無線電信でも、電信を發する時は、鉦をおすと電流が起つて、輪道の切れてゐる部分に火花が出ます、輪道とは電



池の陽極から出て、導線を経て陰極に達し、陰極からまた陽極まで達する一周の道で輪をなします。

その火花が出ると、輪道の切れ目に高く立つてゐる金属に振動が起つて、この振動で電氣の波が生じ、これが四方八方にひろがるのです。これを受ける方では、電氣の波の來てゐる間は、器械が動く様になつてゐるから、普通の電信と同様に、器械が記號を書くのです、この記號は、點と線とです、この線が二本で「イ」とか點が二つで「ロ」とか、前以てとりきめて置けばどんな長い通信でも出来るのです。こんなことならば、かねて著者も存じてゐますが、海の底で無線の電信を見てはこれがどんな風になつて通信ができるかは、一つ魚類の方の味方になつて、研究せなくてはわかりませぬ。さつきまでは、どうして鐵窓を破らうか、どんな方法でこの檻の

中を逃げ出さうかと、種々な考へに眠ることが出来なかつたが、かの電鈴の音を耳にして、この不可思議の城中に於て、又も不可思議の海底無線電信を見ては、益々眠むることが出来なくなりました。この不可思議な海底の無線電信を如何にもして、人類社會に知らしめたい、さうして讀者の前へこの不思議なみやげものをさげてもどりたい。而しこの海底無線電信をしらべんとするにはどうしても、海底のこの城に長くといまつて、魚類のみかたとなつて働かねばならぬ。或は人類社會のことを質問された時は、やむなく返答せなければならぬ。さうすれば人類社會へ對しては實に不忠不義の者として、永久に社會の賊として取扱はれなければならないと思ふと、知りたいたいは知りたいたい、けれ共こんな事を考へると寧ろこのまゝ逃げ出す方がよいか知らん、何うすればよいだらう、とつ追ひつ益々



眠ることが出来ないのです。

夏の夜のあけ易く、城内の隅からホラ貝の音、ドロロンドロロンの訊問されるだらう。その時は何と答へやうかしらん……こゝまでの日記を書きました、こゝにビール瓶のからを幸ひ見付けました、この中へこれをつめこんで波にまかせます。若し天の救いで幸ひにこの原稿がみなさんへときましたときは、著者は……この海底の水城の暗室に囚はれの身となつてゐて書いたものだと思召して下さい。九月三日午後二時海中へ投ず。

### 一八、カミナリ男

空がくもつて来て、ピカ〜、ゴロ〜とやり出すと、この山の

カミナリ男は、いつも楽しさうに山を飛び出して、カミナリの落ちさうな處へ立つて、熱心に空をながめてゐました。

或夏の夕方、餘り暑いものですから、雷獣もたまらなくなつて、ゴロ〜ピカ〜初めました。よせばよかつたのに、餘り興にのつたので、雲次といふ雷獣が、とう〜天から地上へ落ちました、折悪い時は悪いもので、ちやうどカミナリ男が腕をのばして、待つてゐる處へ落ちたものですから、すぐとつかまへられて、とある大きな硝子瓶の中へ入れられました。雲次はその瓶の中へとちこめられ、それから、毎日〜泣かぬ日とはありませんでした、「天へ歸りたい、天へ歸りたい」と云つて、泣きました。

こう云つて泣く時は必ずカミナリ男は、雲次にお臍を二ツ出せば、天へ歸へしてやると云ふのでした、けれども雲次にはお臍が二ツあ



りませんでした。

天では雲次が歸つて來ぬので、母親が心配して毎日毎夜神だのみをして、雲次の歸るのを待つてゐますけれども、雲次は歸つてゆきません、その筈ですカミナリ男の瓶の中へ、いけどりにしてあるのすもの。さてこの瓶はカミナリ男の考へたもので、この瓶は硝子でこしらへてあつて、その四分の三ばかりの高さまで、錫箔といふものをはりつけてあつて、これが瓶の内外ともにはつてあるのです。瓶の蓋を貫いてゐる金屬の棒には、下端に錠が付てゐて、この錠が内部のス、箔につながつてゐます、棒の上端には球があつて、彼のカミナリ男が雲次を入れる時は、この球の處へ一寸頭を付けますと、不思議にも瓶の蓋を開けないで、ちやんと雲次が瓶の中へはいりました。なんと不思議な瓶ではありませんか。

雲次はこの瓶の中で毎日泣いてゐました、雨の降り出しさうな暗い日には、ことにシクシク泣きました。けれども誰れも助けに來るものもありません。處が或日のこと雲次は餘り母様が戀しいので、天に居て兄さんや妹と遊んだ、さうして母様によけいに可愛がられた、いつも母様は僕の味方だつたと思ふと、よけいに母様がなつかしくてなりません、こんなことを思ひ出しては泣いてゐるものですから泣きくたぶれてふらくくと泣きねいりに瓶の中に眠つてしまいました。丁度この時カミナリ男は雲次のお母さんの襟をつかまへてこの瓶の中へ投げ込みました。雲次はびつくりして眼を開くと、日頃なつかしいと思ふ母様、アレお母さんまああなたまで如何して、こんなおそろしい處へ來たのです、僕はこの間からこゝへとぢこめられて、毎日泣いてゐました。



『お前としたことが、男の癖に何て、女々しい氣なんでせう。』  
 『泣いていないで、早くこんな瓶の中を逃げることを考へないでど  
 うします、母さんはキットお前は歸つて來ぬのは、この瓶の中へお  
 しこめられてゐるのだらうと思つて、今日はお前を救ける爲に、お  
 母さんが來たのですよ』『さあ、早く準備なさい』と云つてゐる處  
 へ、放電又といふ雷獸と、ごく仲の好い奴が通りかゝりまして、こ  
 の瓶の中の親子を見て、瓶の外から聲をかけました。折よくカミナ  
 リ男は晝寢をしてゐました。  
 『これ、雷さん如何したんです……』  
 『おや誰れさんかと思つた、放電又さんですか、實はこの雲次がこ  
 れこれのわけで私もこれを救ける爲めに、こんなに苦心してゐるの  
 でございます』

放電又はかねて義侠心の強い男ですから、この親子の物語を聞き。  
 例の瓶の蓋の棒へ手をかけ、外のスッ箆の處へ足をかけて、一聲ウ  
 ンと力を入れますと、不思議や親子は瓶の中から飛び出しました。  
 カミナリ男はこの時、眼を覺しまして、驚いて駆けつけました、が、  
 親子は雲を霞と逃げ去りましたといふことであります。これを今日  
 世界の人が眞似まして、彼の電氣を蓄積して置く蓄電瓶を考へ出し  
 たのださうです。こしらへ方には――さつきのお話のカミナリ男  
 の様なのはレイデン瓶といふ名稱をつけてあります、發電機の起し  
 た電氣が、蓋の棒の球から瓶の内に蓄積されます。その時はむろん  
 瓶を手に持つのですが、何故かと申しますと瓶内の管に電氣を送る  
 と、感應によつて外の管にも異様の電氣が起りますが、異種の電氣  
 ばかり起るわけにはまゐりませんので、外の管にも瓶内の電氣と同



じ電氣が起りますから、これを逃がさなくては瓶内に電氣を蓄積する妨げとなるのです、つまり瓶内には陽電氣が蓄積されるだけ、硝子一重をへだてた外側では、陰の電氣が蓄積されるのです。さうして両方まけずおとらずになるため、どちらにも逃げる事が出来ないのです。これを放電又で中和させますと、電氣が逃げてしまひます、これを放電といふので、形が又になつてゐるので、放電又といふ名をつけたのです。めでたしめでたし。

### 一九 機織姫

夏の半頃から秋の初めにかけて、野邊のくさむらには機織姫が、毎日朝早くからギースチャン、ギースチャンとはたを織つてゐます。このはたおりひめの食べものは、くさむらの葉末に置く、露の玉を

食べてこんな毎日働くので、美しい機織姫は露のめぐみで、ますます美しさが増してゆくのでした。

或朝のことでした、雪ちゃんといふ機織姫が、どうしたことか朝寝をしたものですから、もう太陽がカン／＼照してゐて、美しい露の玉を食べることができませんでした。やむなくその日は空腹を抱えて、おとなしく何知らぬ顔をして、いつものはたを織つてゐました。

「雪ちゃん、あなたは今朝どうしてゐたの？」と隣りの美ちゃんが聲をかけました。

「え、妾、今朝ちよつとお使ひに行つて來たのよ。」

「アラさう、道理でおそかつたはね。」

朝寝坊をして露のごはんも食べられなかつたと、云はれませぬか



ら、雪子はお使ひに行つたとごまかしてゐました。

その日は空腹で働いたものですから、夕方になるとたいへんつかれが出て来て、すぐに床へつきました、熱が出て来て頭がガン／＼痛くて、寐つかれませんでした。

翌朝もこれがため起きられませんでした、さうして露を食べることもできませんでした。毎日これがため身體が糸の様に細つてゆきます、どうしたらよいだらう、こんなことを考へながら床の中に泣いてゐました。お隣の美子はこれを知りまして、毎夜尋ねて来てはなぐさめて呉れました。

こんな風にしてとう／＼美子に進められて、この野から程近い丘の醫者にかゝることになりました。醫者のはた／＼さんは、病家からの使で急いでまゐりました。やがて病人の枕元に座りまして脈や

心臓を見て獨りでうなづきながら、懐中からフラスコといふ硝子瓶を取り出しまして、この中へ鐵瓶の湯氣を入れまして、しばらくこれを冷すと、フラスコの内面にびつしよりと水滴が出来ました。醫者はこの水滴を取つて、病人の口へ入れました。さうして『いや、そんなに御心配はいりません、これで二三日のうちに御全快なさるでせう、まあ兎に角御大事に……』こう云ひながら、進めたお茶も飲むことを忘れて、急ぎ歸つてゆきました。

雪子の病氣はその日から、だん／＼木の皮をへぐ如く全快いたしました。

雪子は病氣全快の祝を催しました、お隣の美ちゃんとそれから友達の間々、それに彼の丘の醫者も招きました、醫者は招ぎに應じまして、よろこんで駈けつけて来ました、今日の服装はかねて雪子が



全快の御禮として、贈りました縁色の絹の羽織を着て、獨り得意氣に笑みを浮べながら話しをしてゐます。

『え、さうですみなさんが手拭などで、御存じでせうが、しぼつて掛ておくと日は當らなくつても、いつの間にか乾きませう、これも水が蒸發したのです。けれどもお天氣の工合によつては、これが一向乾かない時がありますでせう、こんな時は空氣が十分蒸氣を含まからで、こんな場合を我共醫學上では、飽和蒸氣と申します。』

『この間この家の雪子さんの病氣に用ひました、あのフラスコの中へ鐵瓶の湯氣を入れましたでせう、あれは今お話申しました飽和蒸氣の代りに使つたのです。この飽和蒸氣は溫度が降りますと、空氣が蒸氣を持つてゐる力がだん／＼弱くなりまして、蒸氣の幾分もとの水にかへりますので、フラスコなどは一寸したものです、天

から降る雨だの、あなた方の朝な朝なの命の露は、申すまでもなくこの理由からできますので、こんなことをしらべて見ると全く不思議なものです、この水にかへるのを露點に達したと申します。アハハ、ハ、ハ、ハ、』

雪子は全快してから、毎日／＼熱心に機を織つてゐました。さうして秋の初めには丘の醫者へおよめにゆくことに、めでたいはなしがきまつたさうです。めでたし／＼。

### 二〇、母の面影

悲哀や寂寥に囚はれた心を抱きながら、その日の課業を終へて、學校から歸つて來る静子には、我家の門に近くなるほど、あの繼しい今の母様を思ひだして、しばらくは門の柱によりそひながら熱い



涙をこぼすのです。今の母様といふのは、自分の里の財産ばかり鼻にかけて、自分のなすべき家庭の仕事も打忘れた様に、今日は芝居明日は慈善音楽會よと日夜毎、家をよそに遊び廻つてゐるのです。たまさか家に居る時は、静子をまゝ子あつかひにして、有ること無こと數へたてたり、無理難題をもち出したりにして、叱りつけたりぶたれたりするので、静子のこゝろになつて見れば、今の門がまへの家よりも、過ぎにし年の小さな家庭に、夢の間も忘れやらぬ亡くなつた母様と今の父様との、楽しいまどひが思ひ出されては、今の表面だけ立派な家庭の、そのくせ風波のたえ間なき日頃の生活に思ひくらべては、いつも涙の乾く時が無いのです。

今しも學校では終業の鐘が、けたましく鳴りひびいて、どやどやと校門をあふれ出た生徒、さも嬉しさうに、我先きにと急ぎなが

ら家路に向ふ、そのなかに静子ひとりは、

「あゝあ、これから厭な家庭へ歸らなきやならない。どうしたら好いだらう……」と進まぬ足を引きすつて、屠所へ引かるゝ羊のやうに校門を出るのでした。

『あら！ 静子さん何考へてゐらつしやるの……さつきから妾こゝに待つてゐてよ。』

『おや、さう、ゆるして頂戴ね、妾一寸席に忘れものが在つて、取りに戻つたのよ。』

『さうでしたの？ 妾ね、いまの理科の時間に貴女餘まり鬱ぎ込んでゐらつしやつたから、何か心配ごとでも起つたのかと思つてよ。』  
『ありがたうね、さつき妾お腹が痛かつたの、それでだまつてゐたのよ、でもね、もうなほつたのよ。』



『まあ好かつたわね』とお友達のなさけも慰めも、静子の身にとつては猶更苦しいのです、なせなれば、親切な友のなさけや慰めに、心にもなきいつはりを以て答へなければ、ならないかと思へば我身を切らるゝ程悲しい心になるのでした。なつかしい友と別れて、静子ひとりトボくと家路をさして足を運んでゐるのです。心にもなきいつはりとは、實際静子が今日の理科の時間に、考へ込んでゐたのは、全くお腹が痛かつたのではなかつたのです。身體の血液循環器、血は赤血球や白血球の二種あつて、白血球は赤血球の三百の中に一つくらいしかなくて、赤血球の中をアミバーの様に遊び廻つて、血液の中の毒物を取つて食つたり、赤血球がこわれると製造したりするといふ話までは熱心に耳を傾けて何氣なく聞いてゐましたが、心臓の話になつた時、魔ものにでもおそはれた様に、ぶるゝと身震

を感じまして、柳川先生のはなしが少しも耳へ入りません、唯無意識に筆記に書いた位でした。それもその筈です、静子の實の母様はこの恐ろしい心臓病のために亡くなられたのでした。この悲しい追想に囚はれて、友達にあやしまれたのも無理からぬことです、この悲しい思ひを胸深く包んで、かりそめにも今の母様のうわさをもせない様に、務むる静子の苦心何んといぢらしいやさしい心根ではありませんか。進まぬ足も、時たてば静子の身は、いま我家の門の前にたゝすんだのです、耳をすませば今日はめずらしく家の中が静かなのです。静子はツカくと入りました。「只今」とあいさつして玄關にあがれば、臺所の方より足音がして『おや、お嬢様、お歸遊ばせ』と女中のお菊の聲、



『母様は……』

『お留守でございます』

『おやそう……』と云つたもの、静子はホツと息をついて「まあ好かつた」と胸を撫でおろしました。胸を撫でおろして心がおさまれば、また先の母様のことを思ひ出しますので、静子は自分の部屋に入つて、なつかしい母様のお位牌を机の上に取り出して、さめざめと泣き沈むのです。ひとしきり泣いたあとで今日學校で筆記したノートを出しました。どんなことが書いてあるだらう、自分で書いてゐてどんなことを書いたか記憶てゐないのです。

「ノートより」

胸を切り開いて見ると、胸の中一ぱいに、左右に大きなものがある、これを肺臓といふ。肺臓の中央にあるは心臓なり、心臓は血液

循環に最も大切なる道具にして、厚い丈夫な筋肉で出来てゐるものなり、これを胸から取り出して見ると上圖の様な楕圓形で、拳の様ですが中にはポンプの如き仕掛ありて、血液を押し出すなり。中は四部に分れ、上部を左耳右耳と稱し、左右の下部を左室右室と稱す。これ等を左心耳、右心耳、左心室、右心室とも稱す。いふまでもなく、全身の血管と連絡して、古い血液は大静脈よりこれに入り、それより肺にゆきて、美しくされて再び心臓にもどり、大動脈より出で、全身循環に向ふなり。心臓内の各室には入口及出口に辨のもうけありて、工合よく開閉して、血液の逆流をふせぐなり。ポンプ作用にて心臓から大動脈へ出たる血液は、出ると間もなく二つに分れ、頭部に進むものと、胴より四肢に進むものとあり。胴の方へ下つた大動脈はまた分れて、一つは門脈といふところを経て、肝臓に入り、



それより大静脈に進む、一つはそれらの部分をめぐり、これも大静脈に入り、両方おち合つて右耳に入るなり。頭部へゆきしものは大静脈になつてより、淋巴管をうける、淋巴管は血管の外のもので、筋肉などの組織中から、老廢物の幾分を吸収したり、或は新しき滋養物を吸収したりして大静脈に送りといけるものなり、故に上の大静脈はこの淋巴管より送られたものを血液と混じて右耳に送るものなり……

右耳は二つの大静脈より送られた血液を、右室に送り、右室は又これを肺に送るなり、この肺に送る道を、肺動脈といふ、肺より出る時は肺静脈となり左室に入るなり。左耳は伸張して血液をうけ、これの満つるを待ち、収縮して左室に送るなり、左室は血液を受けこれを大動脈に出す、こゝに於て一周循環をなしたるなり……

静子は讀み終つてしまひました、母様はこの心臓が病くつて亡くなられたのだ。あの青白い顔をして床に就いて居られた頃のことを、静子にはおぼろげに思ひ出されてならない。心臓病つてどんな處の病氣か、あの頃の静子にはわからなかつた。『母様母様つて妾が枕元へゆくと、細い手を出して、妾の手を握つては、淋しい笑ひ顔をなさつたつけ……病苦にせめられて、もだえて居らるゝ母様の懐に寝たいと、毎夜泣いて母様をこまらせた……あゝ、わからなかつた、母様は病氣しても永くゝ生きて居らつしやるものと思つてゐた……何て馬鹿でしたらう妾は、母様、母様、どうぞ許して下さいと』心の中に思ひを凝して、亡き母様のお位牌を見つめて居る静子の眼からは、火の様に熱い涙が、ポロ／＼と流れて、もうノートの字もお位牌の字もぼうとして、見えなくなつたと思ふと、その水



晶の玉の如き涙のなかに……なつかしい母様のお姿……『あれ……母様がア……』と思はず叫びながら、とりすがらうとする、夢にさへ忘れぬ母様の面影は消え失せて、机の上にはたゞお位牌のみ淋しそうに立つてゐます。静子は身も世もあらずよゝとばかりに、その場へなき伏しました。

この時しも、玄關の敷石に軋る轍の響物々しく、虚榮の夢にあこがれつゝある繼母の歸宅らしい。静子はけなげにも涙をおさめて、いそぐと玄關に出迎へました。

「お歸りあそばせ」……。

## 二一、腹中の盲目

世間の盲目程可愛そくなものはありますまい、美しい花も愛らし

い鳥も、うつりかはる春秋のながめも、はたまた山や川、希望にみちたる夕雲のゆき、地這ふ小さき蟻にさへあまねく照らす日の光さへ、彼等盲目にはみることとはできぬのです。

この憐むべき彼等盲目は、或は人の肩により、或は小さき杖をたのみて、按摩上下十二文のせちからき渡世や、さなくば人の門戸に立ちて物乞ふ身とならなければ、この生存競争のはげしき社會に生命を保つてゆくことができないではありませんか。

かくて同じ人間と生れ出で、盲目のかなしき、かゝる苦しき生涯を経なければならぬのです。されど讀者よ。著者がこゝに語らんとする腹中の盲目、如何に幸福に、いかに安全に、いさゝかの身體を勞することなく、食に飽き、寒暑を知らざる者ありと云はゞ、讀者はさぞ不可思議の思ひを抱くならん。



「居候や三ばい目にはそつと出す」實にこの句の如く、人間社會の食客は如斯きがね苦痛をしのばねばなりません。三ばい目のおかわりはそつと出す、人間もこゝに至つては實に苦しいものであります。而し私はこゝに語らんとする、人體に寄生する盲目、これ程にくむべきのらくら者は、またこの生物界にありませうか。

人間の居候でさへ三ばい目にはそつと出すに、人の腹内に食客となつてゐながら、誰れにはいかる顔色もなく、食に飽き寒暑を知らざる有様、そも其形はといへば、體細長く扁平く、數多く片節よりなり、頭は細くして裂頭のものや有釣のもの無釣のもの、而もこの頭は吸盤か若しくば釣にて腹の内面に付着てゐるのです。而も彼にくむべき動物は盲目ではありませんか。胃で作られたる養分や、腸で作られた養分を、一言のことわりもなく、この吸盤や釣から吸

ひ取るのです。斯うして人體に害を與へることは申すまでもありません、時としては死に至らしむることもある程です。この恐るべきものは、如何なる方法でそれからそれと、傳藩するかと申しますと、先づ最初卵は、他の動物の體内で幼虫となり、後だんく成長してその肉の中へ入りて囊虫となります。この肉が人間の食用となつて腹中へ入る時は、恐るべき食客となるのです。この食客の一節くの中には卵子をもつてゐて、この食客がずんく生長するに従ひ、節の處より切れて肛門から人體外に出る、これが植物の葉や水の中へ混じて、他の動物の食物となつてまぎれ込んでしまふのです。他の動物とは外でもありません、鮭鱒牛豚等であります。

鮭鱒豚牛の腹中で成長してこの肉の中へ入り込んで囊虫となる、



人間はこれ等のものは食用として、よろこんで食ふものであります、こんな手順をへて我々の腹中へこつそりと入り込むので、経験の無い者には何時の間に入り込んだか知らぬ位なのです。

而もこの食客の盲目であることは、深い理由のあることです。元來人間の腹中は始終眞暗です、眼をもつて居たにしても、何の役にもたないのです。こんな處からして眼は自的的に無くなつたものならん、されど眼はなくとも人間の盲目よりは幸福にかつ安全に居候でありながら、三ばい目にはそつと出す氣がね苦痛もなく、愉快に生活繁殖することを得る、これ程我々人類にとつてにくむべく、またく、恐るべきものはない、さらばこのにくむべき恐るべき食客の姓名は何んと申すかと問ふ者あらば、著者はサナダムシと答へん。讀者よ心してさけますたいの魚類のなま肉や牛や豚等のなま肉を

食することをさげなくてはなりません、恐るべき食客は一言の案内もなく、だんまりでしのび込んで來るのです。サナダムシの他十二指腸虫、蛔虫等も又こんな方法でもつて我々の體內に入り、サナダムシと同様の害を與へるものであります。

### 二二、夜光の玉

「これ松丸や、松丸や」と殿様の御聲。松丸は次の間に畏まつて、御用のかどは」と殿様に申し上げますと、殿様は何時も御氣色うるはしく、「松丸！もそつと近こう」と仰せられますので、松丸は何事の用事ならんと、わるびれたる姿もなく殿様の御側近こうまいりました。

「松丸いまお前を呼んだのは他の事ではない、この城下の海邊に、



この頃夜晩夜光の玉が、浮びで、海の上に光つて居るといふ、風評とりどりだ。知つての通り私が殿中には、寶の玉といふのは極く少ない。ことにこの年の春になると、異國から使者が来るそうだが、若しこんなことが使者に知れると、この殿中の名面にも關するわけぢや。私はこの風評を聞いて、その夜光の玉を欲しくてならぬ。大儀ながら松丸、お前これから行て、その玉を探して取つて來てわくれぬか！ といふ御言葉です。松丸はまづ畏つて

「何事かと思ひましたら、あのこの頃風評のある夜光の玉を取らいたとの御思召、元より御殿様の御命ならば、この松丸日頃の御恩返しのため、たとひ火の中水の中、鷺の住むてふ高山も、虎の臥てふ滿韓も、後えわ引かぬこの松丸、夜光の玉の一つや二つ、お易い事で御座ります。」

「何んと、松丸、お前は快ううけてくれるとな。それは千萬かたじけない、先づ當座の褒美として、これをとらせやうと殿様が御寵愛の浮袋を賜はりました。

松丸は殿の御前を退き、彼の浮袋をたずさへまして、彼の夜光の玉の風評とりりなる海邊へと急ぎました。緑の松や白い砂、これ等の眺望はさながら繪のやうでありました。けれども夜光の玉のみに心をそゝいでゐる松丸には、この活繪もこの眺望も服に映じぬのでした。

濱邊の漁夫に道を尋ねながら、急いでとある海邊に着きました。これなん夜光の玉の毎夜く浮び出てゐる海邊でした。やがてその日もだんく暮れかけましたので、松丸はその海邊の漁夫より借りいれました小船に乗込み、かねて御殿より賜はりたる浮袋とを用意



して沖をさして漕ぎ出でました。

海は折しも青疊を敷いた如く、船をやるには何の苦痛もありませ  
ん。漕ぎゆく中に日はとつぷりと暮れて、四方は暗黒になり、唯天  
上には花の如き星かげばかり、ヒタ／＼と波の船ばたをた／＼く音も  
静かでした。

松丸はふと眼をあげて、前途の方を見やりますと、そこには天よ  
り降りし星の輝か。はた海底より湧きし夜光の玉か。見えつ隠れつ  
波間に輝く光の玉、「名玉！ 名玉！」松丸は僅時船漕ぐ手を止めて、  
こう叫びながら驚きの眸をみはりました。

やがて松丸は彼の浮袋を身體に附けまして、海中へざんぶとばか  
り飛び込みました、心得たる拔手の泳ぎ、光り輝く名玉のところま  
では何の苦もなく泳ぎました、光の玉は最早や目の前、松丸は得た

りと双手に抱かんとする刹那！ 不思議や今迄光り輝ける彼の玉は、  
魔か妖か、かき消す如く見えなくなりました。松丸はこの遇然の出  
來事には、唯驚く外はありませんでした。松丸は力無くなく再び船  
へ泳ぎかへり、僅時海面を見て居ますと、サツキ迄一つと思ひし名  
玉は、不思議や不思議や彼方にも此方にも三ツ四ツ五ツ！ 松丸は  
狂氣の如く喜び再び海中へ飛び込みました、されど取らんとすれば  
消え、泳ぎついて最早や我物と思へば、その瞬間彼の無数の玉は、  
以前の如くかき消えて、松丸の希望は水の泡と消えんといたしまし  
た。松丸は狂氣の如く蕉心ばあせる程、氣も弱り心も弱り、はては  
泳ぎつかれました、からだや腕は綿の如くになつてしまいました。  
折しも天は、墨を流した様に曇つて來ました。大滴の雨がバラバ  
ラと一陣の強風とともに降り出した。松丸は船の方へ一心に泳ぎま



したけれども、何時の間にかこれを見失つてしまひました。松丸は疲労と驚きのため、氣が遠くなつて波のもてあそぶのにまかせました。

松丸は海の藻屑となつたでせうか。

翌朝とある海岸に、ひとりの少年が波に打あげられて、死んだ様に眠つて居ます。これまごふかたなき松丸でした。松丸は人事不省になつてゐるのです。處へ何處からともなく一人の崇高翁が現はれまして、松丸を呼び起しました。松丸はふと眼を開けてみると、立派な翁、昨夜からの次第を語りますと、翁はさも感心した如く「ウ、成程、よく主の命に従つて、この荒海へ夜光の玉を探しに來た、まことに感心な少年ぢや、けれどこの海のなかに毎夜輝くものは、夜光虫といふものぢや、その夜光虫といふものは、動物の中で一番

下等なアミーバと云ふ原生動物の種類で、これ等の動物はからだは單一の細胞から出來てゐて、手足は勿論口、胃其他の器管を有つてゐないが、それでもよく獨立して生活するのだ、ぞうりむし、つりがねむし、夜光虫などはアミーバとは少し進歩してゐるものだ、兎に角、夜光虫が口のあたりが陥没してゐてそこに鞭毛と觸毛とをもつてゐて、これで生活してゆくのだ。これ松丸とやらお前が海面に光るものを認めたのは、この虫の作用ぢや。」

「けれど、夜光の玉を得なければ殿様の處へかへるわけにもゆくまい、けれどそんな希望はとても成功せない、でこの玉を二ツ少年にやるから、これを持つて殿様の處へ歸つたがよからう、どうぢや。」  
松丸はこの詳細物語をきゝまして、海面に光るものは玉でなくて虫なることを知りました、翁に厚く禮をのべて彼の玉を二ツもらひ



受けました。翁はこの玉を松丸に渡すと共に姿がかきけす如く消えてしまひました。

松丸はこの玉を大切に、殿様の館にかへり、これを献上致しますと、殿様の喜びはこの外でした。松丸は海中の出来事より翁のはなしまで、おちなくいたしました。そうして結構な御褒美を受けましたとめでたしく。

二三、ホタテガヒとハマグリとの喧嘩

或日のことハマグリとアサリとが泥の中で仲よく餌を喰つてゐました。アサリやハマグリは、こんな風に年中泥の中を住家として、埋くまつて居ながら、水管といふ呼吸に必要な部分をもつて、水中の空気を呼吸してゐます、だから餌も別段口といふものがなくて、

この水管から水と共に流れ込んで来るのを食ふのですから至つて骨折がないわけでした。

「ハマグリさん、今日は餌がたくさん流れて来て結構ですね」とアサリがホク／＼ものでハマグリに聲をかけました。

「君の言ふ通り、大へん餌が流れて来ますね」とハマグリも上々の氣元です。

「オヤ、誰か私共の上を通る様ですな！」とアサリがハマグリにしらせますと。

「成程、誰れか通る様な音がしますね。」  
「誰れでせう、きつと餌を横領に来たのでせう。」  
「誰だ！ 誰だ！ 無断でこゝを通るものは」とハマグリが立腹して聲を立てますと。



「誰れとは何だ！ 貴様達こそ何者だ。」

「貴様達こそ何だつて、生意氣なことを云ふない。」とアサリは聲荒らゝかに。

「ハア、ア、アサリやハマグリのお目供か、アハ、道理で、誰れだ誰れだなんて生意氣なことを云ふと思つたら……」

「何、盲目だと、盲目ならどうしたい、貴様等の様に目が見えなくても、餌に不自由はせないわい、餌は遊んでゐても水管から流れ込んで来るんだい、フン………不必要なればこそ目が無いんだい。」とハマグリがウンとキメ付けると。

「へへん、盲目の癖に口だけ生意氣なことを云ふない、こう云ふ我輩が誰れだかわかるまい、へへん憐れなものだ。」

「貴様達は、ホタテガヒだらう、眼は無くてもちやんとわかる方法

があるわい。憐れなものだつて、貴様達こそ憐れなものだ、此方人等の餌の流れて来る道にでばつて、横取りするのだらう、貴様達こそ盗人だ。」

この喧嘩はなかく、際涯しがつきません、我々の考へる處では、動物といへば大抵皆な目を持つて居る様に思ひますが、たまには目の無い動物が居るのです。即貝類の中でもこのアサリやハマグリは目が無いのです。これはハマグリが言つた如く不必要だから無いのです、而しホタテガヒなどには澤山に目を持つてゐる、これ水中を泳いで、餌も探がさなくてはならぬし、敵の何處に居るかも見なければならぬ處から、自然眼はなくてはならぬであります。こんなことを考へて見れば、これ等の動物の生活する、周囲の状態に依つて變化するものだと考へられます、目が無くてはならぬやうな處に



住んでゐるものは、之が無くてはならぬが、別段無くても不自由でない處に居るものは、缺けて居るといふ理屈であります。

ホタテガヒとハマグリとの喧嘩はなか／＼止みさうもない。

「喧嘩いね」とこの時、通りかゝつたフヂツボカヒが聲をかけた。

「何うしたんです、兩方ともまアお静かになさい。」と兩方の間に割り込みました。

「いやフヂツボ君、君聞いて呉れ給へ、僕がこゝを泳いで通らうとする、この奴等がぐるになつて喧嘩を吹きかけたんです。」とホタテガヒがさも同情を引起す様に云ふ。

「へへん、勝手な熱を吹きあがれ、誰れに案内もなく此方人等の繩張内へ來やがつて、餌を横取しやうとしたくせに」

「まアまア、兩方共お静かになさい、静かに云つたつて事がわかり

ますからね」とフヂツボ君は例の雄辯で、この兩者の間を和解せしめんと、口を極めて兩者の非を解きました。元來兩者共わからずやでないのですから、漸く感情を和らげて、とう／＼フヂツボ君にすべてをまかすことになりました。其後ホタテガヒはアサリやハマグリの淺海へでばつて來ない様になりましたといふことであります。

### 二四、森の秘密

春は麗かに晴れ渡りて、野には菫蒲公英紫雲英など、色とり／＼に咲きそろひ、散歩つみ草にはこよなき日でありました。

同じ咲く花のうちでも、やはり野に置き紫雲英と申す位、とりわけ赤紫に際立つて、美しく見えます様は錦布を敷きつめたる如く、野面一面に咲き揃つた様は、とても菫や蒲公英の花の及ばぬ處です。



この紫雲英は俗にゲンゲ(シヨウメンサウ)と呼び、ツメクリ、ウマゴヤシ、ニハフゲなど、同じく豇科に属する越年草で、花は蝶形花で五枚の花弁からなつてゐます。此小花の集まつて一個の花輪をなしている所は、恰も小さな蓮の花の如き處より、蓮華草と名づけられたので、紫雲英とは、唐から渡つた名であります。

はなしはよそにそれましたが、この日のこと日頃仲むつまじき姉と妹とが、日曜日(にちそび)を幸ひ、ほど遠(とほ)からぬこの野へと、つみ草にまいりました。

姉妹はこの美しい野のながめをほしいまゝにして、姉の咲子は、ナズナ、ツクシなどを採(さが)し廻(ま)りました。妹は唯この美しく一面に咲き揃(そろ)つた紫雲英に心を奪(うば)はれて、ツクシやナズナなどはとんと見付(みつけ)かりませんでした。

『姉さん、妾(わがし)この紫雲英を摘(つ)でよ。』

『すま子さんはどうしたの………ツクシやナズナを摘む約束(やくそく)で来たんぢやありませんか。』

『だつて姉様の様に摘めないもの、そうしてツクシなんか一寸も見(み)當(あた)らないのよ……。』

『すま子さんはいけないわね、この紫雲英はね、百姓(ひやくしやう)の方が大變(たいへん)大切(たいせつ)にするのよ。』

『アラ、どうしてこんな花を大切に……。』

『すま子さんは知らないけどね、豇科植物(とうこじぶつ)のね、大豆(だいづ)やそらまめやえんどうや紫雲英(れんげ)の根(ね)を見(み)ますと細(こま)かい瘤(こぶ)がありますのよ、此(こ)の細(こま)かい瘤(こぶ)がね、バクテリアといふ一種(しゆ)の動物(どうぶつ)の作用(はたらき)で出来(でき)たもので、此(こ)のバクテリアは植物(じぶつ)の生長(せいちやう)に最も必要(ひつやく)な窒素(ちつそ)といふものを吸収(きうしゆ)す



る性質がありますのよ。』

『あら姉さん！　うそ！』

『まあ、だまつて聞いてゐらつしやい、それでね百姓が、田畑に大便や小便やホシカをやるのはつまり農作物に窒素を與へん爲めなのです、でこの紫雲英はツメグサやウマゴヤシなど、ともに、百姓には大切な肥料草なのです。この頃はこれを田畑へ作つてある位です、つまりこれを肥料にする爲めなのです。』

『だつて妾、姉さんの様に學校でまだそんな事、おそはらなくつてよ。』

すま子は姉の咲子の熱心に教へて呉れるにもかゝはらず、これを聞きさうにもせないで、やつぱり紫雲英を摘んでゐました。そうして姉さんの咲子に見付かりましてはまた説教を聞かされるので、な

るべく姉の方へは遠ざかつて摘んでゐました。

『おや、むこふの方が綺麗だぞ』と駈け出しては、次から次と野をさまよひました。その駈け出すはづみに、あたりの紫雲英の咲き亂れたなかゝら、越年蝶や丸花蜂、蜜蜂など、驚いて飛びたつのでした。これ等の蜂や蝶はある時期には紫雲英の葉を食べて、害をなす時もあります。花の咲く頃は實結ばせるのに助けをなすものです。

『アラ、こゝは思つたよりきたないわ、むこふの方が美麗なこと！』  
こうしてすま子はだん／＼野邊のはてに至るまで、自分がどの方向に進んでゐるのか、はた姉さんとどれほど離れてゐるのか、咲き揃つた花に心を奪はれて、少しだに心づきませんでした。

すま子は餘り摘みましたので、手にせる籠が重くてなりません、姉さんに手傳ていた／＼こうと思ひました。ふと咲き揃つた花から眼



を轉して、姉さんはと見ればこわ如何に。いつの間にか松杉檜の大

樹のそゝりたつ森のふちに立つてゐるのでした。  
『姉さん！ 姉さん！』すま子は聲を限りに姉さん呼びました。

何の答もありません、只森の遠くの方に、姉さん……姉さん……  
すま子は今は泣聲になつて、姉さんを連呼いたしました。されど

姉さんの姿は見えません、狂氣の如く呼べど叫べど、唯答へるもの  
は森のこだま。  
すま子は何と思ひましたか、森の奥さして駈け出しました。

『姉さん！ 姉さん！』  
紫雲英の籠はそこへなげ出され、髪はおどろにとり亂れて、すま

子はとある大樹の根元に死せるが如く打倒れてゐます。

この時しも森の奥より、ズシン〜と大地もゆるぐばかりの音し  
て、何物かこちらへ近よつてまいりました。やがてメリ〜と大樹  
の倒れる音が致します。すま子はこの物音に再び死せるが如き境よ  
り眼を開きました。をそれにおのゝく心を静めて物音のするはるか  
の彼方を打見やりましたすま子は、何物を認めけん急に元氣よく駈  
け出しました。

すま子が認めしものは、この森に年古く住む柚人でした。すま子  
はこの樵夫に救けられて、この森にそだてられてゐます。  
今はこの森の精となつてゐるてふことですが、時折には姉や母を  
尋ねて森のはてよりはてにさまよふことがあるとの事、されどこは  
森の秘密として、彼の柚人さへもうちとけて里人には語りませんで  
したといふことである。



二五、猿ヶ島大王

周圍七里の一孤島、四面は海を以てめぐらし、稜立たる巖壁、激しく打ちよせる波、その波の音は永遠に吠えて、どなつて、眞白な怪物のやうな波頭を立てる。この波の間から見える、黒い岩の群れ。若し潮流の最も劇しく、暴風これを助けるやうな日は、戦闘艦でもこの猿ヶ島へ近づくことは出来ない程でした。さうしてこの島内には島の名と同じく、古から猿の群れが住んで居て、これ等の多くの猿は、互に一ツの規律のもとに一家族のやうに仲よく暮してゐました。そのうへこの一族を統率してゐる、天狗猿がすべて島内の権力を握つてゐて、その聰名なことは申すに及ばず、自己の部下の統一には専心力をつくしますので、誰れ云ふとな

く「猿ヶ島大王」と稱してゐました。

或日のことこの大王が、二三の部下を従へまして、島内を見廻りました。いましも大王が海濱に立つて、小猿共の魚獵をなしてゐるさまを熱心に見てゐると、何處からともなく、いたく激した聲で、何事か言ひ争つてゐるのが耳に入りました。大王は何事ならんと耳を傾けてゐますと。

「猿は人間の先祖だい、それが間違つてゐると思つたら、誰れにでも聞いて見給へ、へゝん大概な人が君の説に賛成するか、我輩の説に賛成するか、論より證據だい。」甲走つた聲で言ひ張つて居る。

「いや、君の説も一理はあるだらう、けれど君の説のよりところが間違つて居る、猿は人間の先祖でないことは僕ばかりの説ぢやない。ダーウ井ンだつて誰だつて私々が人間の先祖であるとは決して云は



なかつたのです。唯これ等の人々が我々の先祖と人間の先祖とが同じいものであると云つた計りなんです。」と一方はおとなしく自分の説を論じてゐる。

「君は第一生意氣だ、何だダーウ井ン、あんな學者のいふことは、からけつ信じられないぢやないか、我輩の説は決して間違つてゐない、甲走つた聲の猿は、學者の説をぶつこわして、自分の説を通さうとしてゐる。」

「だけれど君、この島の中で、人間の子供を生んだものは無いぢやないか。小麥からパンも出来れば饅頭も出来るが、饅頭の皮からパンが出来ると云ふことが、どうしても信じられないです。」

「何、信じられない、随分強情な奴だな、我輩等の體格と人間の體格と同じいことが、君の眼に見えないのか、人間だつて我々の様に

毛の多い人間の居るのを、君の様な青二歳は知らぬのだらう、生意氣だ。」

「何と云はるゝとも僕は死しても決して信することはい出来ません、何と、死しても信することが出来ない」と甲走つた聲は、益々激した聲で

「ハイ、信することは断然出来ないのです。」  
「貴様は信することが出来ない、好く言つたな。」激した聲はもう腕力に訴へさうだ。

大王は今迄黙つて耳を傾けて居たが、ふとこの時足を早めて、論争の聲する方へと急がれた。彼のふたりは大王が背後に立つて、見て居られるとは夢にも知らない。

「ヨシ、貴様は我輩を侮辱するな。」



「これだぞ！」と彼甲走つた聲の猿は、ポケットに手を入れたと見る間に、取出したる六連發の短銃、おとなしい猿の胸に差し付けた。

「ハ、ハ、君は腕力に訴へる心算か、打つなら打つて見給へ、僕は生死の爲めに主義はまげないから……。」

「ヨシ、それだけ聞けばたくさんだ」とあはや引金に指をふれんとする刹那！

『馬鹿者！ 僅時待て！』と大王はやには彼の短銃を差し向けたる猿の手を、持つたる杖で折れよとばかり打たゝきました。短銃は手をはなれて地上へ落つて、ズドンと一發中空に響いて、不幸大王の耳たぶをかすめて飛びました。

驚き見上ぐる大王の顔、鮮血淋漓たるを見た彼等二人は、顔はも

う眞青に變つてしまひました。

城中よりこの不時の出來事を知つて、駈けつけたる侍醫は、日頃の手練この時ぞと、早速の應急手當をなし、王はタンカの人となつて城内へお歸りになりました。

後にのこりし彼等二人は、すぐと國事犯として法廷へ引つたてられました。短銃を持ち出した猿は、白を黒と黒を白と、自分の罪をのがれん爲、さもなさけあるらしい聲で申したてました。けれども事實は當底動かすことはできません。彼はとうとう死刑の宣告を與へられました。この事を御病床の大王が聞かれました。特に一等を減じて、猿ヶ島放逐の刑に處せよとの命令が下りました。

數日後の朝まだき一艘の獨木船が、波の間に漕ぎ出でました。これ放逐の刑に處せられたる彼の小猿です、彼は住みなれし猿ヶ島



を涙ながらにはなるゝのでした。

### 三六、煙突の涙

糠雨のジメ／＼降る或日のこと、市街の端れに聳え立つて居る、  
鐵製の煙突が、何を感じて泣くのか、雨にぬれながら、ポロリ／＼  
と涙を出して獨語を言つて泣てゐました。

處が今迄勢ひよく、雨の降るのものともせず、コモ／＼と立ち  
昇つてゐた煙公が、この泣き聲をき／＼つけて、煙突のそば近く寄つ  
て来て、さも親切に問ひ掛けました。

「これ／＼、煙突さん、お前は何んで泣いてゐるのでござる、何か  
心配ごとでも起つたのですか。それならばお互の事だ、私も及ばず  
ながら力を借さう程に、まアまア涙をおさめて……。」と言葉を切

つて、

「今日のやうな春と云つてもまだ薄ら寒い、いやにジメ／＼した雨  
の陰氣な日は、お互に面白かつた昔のはなしでもして、愉快に氣を  
晴らさうではないか。」

「おや／＼、誰れかと思つたら煙さんか、これはまた年可比もなく、  
涙を見せて、何ともすみませんこととでございます。」と煙突は猶涙聲  
で、

「いや／＼、そんな他に人行儀はいらぬこと、お前様のやうに何時  
も考へ込んで許り居らぬものぢや、身體にも好くない、お互にはな  
しでもして氣をまぎらさう程に。」

「これは又煙さん、いつもながらの御情、千萬かたじけなく思ひま  
す。それにつけても今の世間、石炭と云はれ、鐵と云はれた若い頃



は、やれ活動だ文明だともてはやしてゐながら、煙や煙突となつてしまへば誰れ一人顧みて呉れるものもないなさけ無いありさま。』

「これく煙突さん、そんなに身をはかなまむものだ、そりやお前さんの御なげきの通り、世の中の人達は、石炭や鐵が文明世界の必需品の二ツだと云つて、何の彼のと口車にのせて、深山の底から、生き馬の眼を抜く様な、こんな恐しい都會へ連れ出して、汽車だ汽船だ器械だのと、身を粉にくだいて使つたり、ろくく都見物もさせて呉れないで、こんな所へ連れて来て、雨の夜も風の日も追ひ使はるゝその苦勞は、私だつて同じいことぢや。」とつい石炭の煙も、つり込まれての不平だらく、

『考へ込んで見れば煙さんや煙突ほどつまらぬものは無いでせう、もとをたゞせばこんな身でもないものを、石炭と鐵、食物の吾々に

缺くべからざると同様だから可愛がつてやるなど、人間の口のうまさかげん。文明だ進歩だと、人間ばかりの智能や才能でなつた様に思つてゐるだらうが、大間違、石炭がなければ機械が動きもすまい、鐵がなければ機械や軍艦も出來はすまい。』

「最もです、こんなことを云へば、石炭の代りに電氣なり石油なり薪炭なりを使ふてもよいといふだらうけれど、それでは經濟がたもてまい。」

『それがこの有様、ペンキの塗もはげれば、眞黒に汚れても、少しもかばつては呉れず、日毎夜の追ひ使ひ——のう煙さん。』

「今更昔を思ふて泣いたとて、返へらぬことぢや、これも運命とあきらめて、のう煙突さん、お互に力になつて行かうぞいの。」

『これはまた、煙さんのありがたい御言葉、今更昔を操りかへして



もせんなき業、こちらよりのぞむ處、この後は何にくれと互に助け合ふのがかんじん——』

「おう、そうだ、これも運命のなすこと、お互に國家のためには倒れるのだと思へば、また廣い世間への誇りともなること、不平を言はずに人間の云ふがまゝに従つて行かうぢやないかのう煙突さん。」  
こんなにして互に慰藉めたりなくさめられたりしてゐました、雨は遠慮もなくジメ／＼と降つてゐます。

折から下の方に當つて、けたましましき汽笛の音。中食の合圖らしい。人はいま食に餘念なしと見えて、投げ入る、石炭の手も箸に取りついでて容易に離れようとはせぬ。煙の色はだん／＼薄くなつて。唯煙突のみは四時かはりなく、雨にぬれ風にさらされて、空中高くそゝりたつてゐるのである。

### 二七、櫪の木と牛

ある處の廣い／＼、牧場に、一本の大きな櫪の木がありました。その根本の日當りの好き處に、種々の牧草が茂り合つて生えていました。そうしてこの牧場に飼育れてゐる數多の牛は、朝は早くより夕べは時おそくまで、この牧草を、たべたり牧草に眠つたり、で緑の牧草は、或時は牛の食料となり、或時は牛の寢床となつたりするのでした。

櫪の木は空高く聳えてゐて、同じ仲間の植物でありながら、斯くも物哀れな運命に服従つてゆかねばならぬ、この憐むべき牧草の末路を思ふて残念に思つてゐました。

或日の事、一疋のまる／＼と肥えふとつた赤牛が、この櫪の木の



立つてゐる下へのそりくくとやつて来ました。折柄、夏の事ですから焼きつける様な太陽が、用捨もなく地上を照しつけてゐます。彼のいたくしき牧草も半ば折れ曲つた様に、その葉や頭を垂れてゐるのでした。櫛の木は見るに忍びず、太陽の直射をよけて、この牧草に蔭を與へてゐる處でした。

牛はこの炎天に、涼しそうな木蔭を見つけたので、得意な鼻歌を唱つてこの蔭へ来ました。これを見た櫛の木は、日頃の無念がムラムラとこみ上げて来ました。けれどもうっかりした事を言ひ出しては、返つて亂暴な牛に仇をされては、つまらぬ事と、無念を壓へて牛の舉動を見てゐました。

牛は櫛の木がこんなことを考へてゐるとは知りません。のそりのそりと牧草を食ひ初めました。やがて涼しさうな處の、牧草のた

くさん生えた上へ、ごろりと寝ころびました。そうしてスヤ〜と楽しい夢に入つたらしい。

無念をこらへて見てゐた、櫛はこの時は勘忍の袋の口も切れて、

「これ〜、牛どん〜、」

牛はふと呼び掛けられたので、誰れだらうと思ひながら、まだ眠さうな眼をキョロツとして。

「誰だ、おれに用事のあるのは……。」

「いや誰れでもない、此櫛だ、別段に用事といふこともないが、お前の氣樂な様子を見て、お蔭で毎日苦勞の種を作つてゐる者を見ると、可愛さうでならぬから……ふと呼び起す氣になつたので。」

「アハ、誰れかと思つたら櫛さんか、これはまた、奇怪千萬、誰が私の爲で、毎日日苦勞の種をまく者が居らうぞい……。」と



牛はまだ起き上らうともせず、斯う云へば。

「これはまた、意外の挨拶、お前が毎日くゝの食物や、寢床の代りとなつて、苦勞してゐる者があるぢやないか。」と言葉を切つて。

「可愛さうに、いまもお前のからだにしかれて、痛さにこれへきれず、シクシク泣いている牧草の身の上を、一寸は可愛さうだ不憫だと思つてやつた處が、よさそうなものだ。」

「ハ、ハ、これは慳さんとしたことが、あんまりそれは不明ぬはなし、お前さんなり牧草なりが、毎日私から受ける恩も知らないで、可愛さうだ不憫だと思へなど、は、餘り義理をかけたお言葉ぢやないか。」この時牛はのつそりと起き上りました。

「御恩よばはりこそ奇怪千萬、なるほど肥料の幾分は、お前達の排出た不潔なもの、大小便から取るけれど、お前から直接に貰ふので

はない、礦物の一種として、礦物界から貰ふのだもの、それに動物こそ、植物に恩を受けてゐるものはあるまい、動物の食物の多くは植物界から、とるのではないか。」と慳は一陣の風にウナリを立て、猶言葉を つぎ、

「それに植物の食物は、礦物だ、これが植物の體內に入つて、他のものと合つて、新しい植物の體を組み立てるのだ、それやこれやで植物だの動物だの礦物だのの間には、物質の循環變化はあるもの、さし當り直接にお前達になさけをほどこしてゐるものは、この植物ぢや。」

「この熱い日の中に、この蔭緑で安全眠つて居られるのは、誰のおかげだと存する、これ、牛どん黙然て居ないで、その返答を聞かうぢやないか。」と慳の木は、今はこれまでと日頃の無念を晴さんた



め、たゞみかけく、て、風にウナリを立てながら、牛の耳も破れよとばかり吹込むのでした。

『これははや、樫さんの御立腹、けれど樫さんお前の云はるゝ通り、動物は植物を食ひ物としてゐることは間違の無いことだが動物は日毎夜毎、起きて居る間も、寝て居る間も、空気の中の酸素を取つて、お前達の必要な炭酸瓦斯をこしらへて置くではないか、これを見れば、やつぱりお前達は、動物達の恩を受けてゐる……』と牛は日頃の性質として、落付拂つて答へる。

「アハ、ハ、ハ、こんな水懸論をしてゐた處でせんなき業、しかし牛どん、今の言葉は、受取れぬ、炭酸瓦斯は植物に必要なことは、今更言はなくても昔からのこと、けれどこれを動物からこしらへて貰ふとは、天と地とを間違へた話し。植物こそ空気の中から、動物の

不必要な炭酸瓦斯を取つて、その代り美しい酸素を出してやる。若し植物がこの働きをせなかつたら、動物こそ、死ぬのじやないか、餘り心得違ひを云はぬものだ。」と樫はなかく、牛の言葉に従はない。どちら等に利があり非があるか、この水掛論はなかく、勝負の着きさうな様子もない。もとをたゞせば、牧草から起つた論判、両方とも青筋立て、言ひ争つてゐるさまを、側にだまつて見てゐる牧草の心は、たとへるものなき程心苦しうございました。日頃なさを懸けて貰ふ樫に助勢すべきか、はた後難を思へば牛に加勢すべきか、はたまた両者の仲裁となるべきか。とつ追ひつ心に決し兼ねてゐました。

するうちに牛は遂に腹をたて、亂暴を働き出した、樫の木の幹を、かの鋭き角で、裂き初めましたのです。樫は痛さに枝葉や梢にウナ



リをたてましたが、牛は少しの用捨もせず、檜の木皮を破つてしまひました、さうしてとうく檜の木をからしてしまつたといふこととであります。

### 二八、母の戒

『海吉や、海吉や』と母のかれひは、今し悪戯に餘念なき、海吉を呼びました。海吉はまた母様の小言だと思つて、岩の蔭にかくれました。

「ア、いやだ、僕が少し面白い遊びをやつて居ると、すぐ母さんに見付かつて、お小言頂戴だ。」とつぶやきながら、岩にからまつて居る海草を、むしつたりちぎつたりして、これを水に流したり遠くへ投げやつたりして、その流れゆく状態の面白いのに、我を忘

れてみとれてゐました。

海吉が今しも、海草の一ツかみを取つて、上の方へ投げやらうとする途端、ふと岩の上の方を眺めますと、真黒な顔の眼ばかりピカピカ光らした、まぐろの恐ろしい姿、熱心に海吉の舉動をうかつてゐる、若し海吉に少しの由断があらば、たちまち飛びかゝつて、取つて食をうとしてゐます。

これを見た海吉の驚き、まア如何してこの場を逃げやうか。との考へさへも浮びません、唯身を震はして岩にしがみ付てゐました。全く海吉の命は風前の燭火の如く、今にもまぐろが飛びかゝればそれ迄のこと。この時海吉には天の興へか一ツの良案が見付かりました。それは海吉が隠れてゐる岩かげの薄暗い所に大きな貝を見出したのであります。海吉はこれを取る間も早く、岩上ににらめつけ



てゐる、まぐろの口の當りへ投げ付けました。この突然の出来事に  
まぐろは、ふと身を引きますと、思ひかけなきさも美味さうな貝が  
一ツ、まぐろは思はず口を開いて、これを食べるますと、また一  
ツ……………二ツ三ツ……………

海吉はこの隙にと、矢庭に岩蔭を飛び出しました、背後をも見ず  
に一目散に、我家へとかけつけました。息せき切つて玄關から飛び  
込みますと、折しも母様が臺所口で、夕飯の用意をして居られまし  
た。

海吉の飛び込んで来た、物音を聞つけて、何事ならんと出て見れ  
ば、海吉は青くなつて足をなげ出しながら肩で息をしてゐました。

『これ海吉、お前はまア、さつきから呼んでゐるのに、何處で悪戯  
をしてゐたのです、まアその顔の色は……………』と母様の驚きは大體

ではありませんでした。

『そのさまは、まアどうしたと云ふのです』と問ひつめられるので、  
海吉は今ばかりすくすくも出来ず、先刻からの出来事を話しました。

「ほんとに、母さん、僕は如何せうかと思ひましたよ、けれどまぐ  
ろの奴、貝を投げ付けてやつたものですから、とう／＼それにごま  
かされちやつたんです。」

『お前としたことが、何時も母さんの云ふことを聞かないから、そ  
んなひどい目に逢ふんです、まア、あの意地きたない、まぐろなん  
かに見付かつて食べられて、しまつたらどうします……………』

『これからもあることです、好く注意して母さんの云ふことを聞か  
なくてはいけません。』

海吉もこの時ばかりは、母さんの戒を守らねばならぬと思ひまし



た。遊びに出るにも何時も、なるたけ深い海底の砂の上に、扁平になつてその腹の白い處を出さぬ様にして、背鰭や臀鰭の長くついでる、背の黒い處を出して遊んでゐました。これは母さんから何時も、言ひ聞かされる注意でした。この黒い方さへ出して居れば、砂の色と似てゐるから、決して他の強い魚類に見付かることもなく、全く保護色なのでした。遊ぶ時も貝類を捕つて食ふ時でも、この黒い方を上にして游がねばならぬと母様に戒しめられてあるのです。まぐろに見付けられて生命があぶなかつた、この出來事の在つた當座は、好く母様の戒を守つて、砂の上に遊んでゐて、遠出は致しませんでした。而しこれも初めの内ばかり、だんく過日の恐ろしいことが、頭を去つて記憶が薄くなりゆくに伴れて、どうしても扁平に遊ぶことが不自由でした。その上一ツの目は何時も、面白くも

なき砂地ばかり見てゐなければならぬ、それが海吉にとつて非常な苦痛でした。こんなことで母様に見付からない處では、こつそりと他の魚類の様に游いでみました。或時は、我家を離れて、遠くへ出て遊ぶこともあります。周囲の面白さと、美味な貝類のたくさん食べられるのとで、海吉はまぐろの一件を全く忘却してしまひました。母様の保護色に付ての戒も全く思ひ出さぬのでした。さうして毎日遠出をしては、他の悪い友達と悪戯ばかりに耽つてゐました。母様はこの有様を見て、毎日く心痛の絶間もありません。時々海吉を呼びまして、注意しますすけれ共、海吉は馬の耳に東風と聞き流してゐました。

母様は心痛の餘り、程遠からぬ岩窟内の造化の神様へ、日參を致



しまして、造化の神へ「海吉の眼が、二ツとも右側につく様に」と  
祈願をいたしました。

海荒るゝ日も、波高き日も、祈願の爲めには一日たりとも缺かさ  
なかつた程でした。或日の事、社別に叩頭き祈願を込めてゐますと、  
社殿の奥より御聲ほがらかに「祈願のこと日頃の信心により、かな  
へてつかはす………」と耳に入つたと思へば、知らずくゝ目が覺め  
ました。

海吉はこの日、友達と悪戯をしてゐますと、如何したはずみか、  
友達の尾の先が左側の眼に突き當りました、それきり見えなくなつ  
たので、泣きくゝ我家へ戻りました、我家の門を入つたかと思ふ時、  
右側の方に目が二ツとなりました。この不思議な出来事に驚いて、  
茫然と門口に立つてゐますと、今しも母様のお歸り。

事の次第を聞き、海吉は母様に今迄のことをわびました。さうし  
て母とともに、造化の神様へ御禮參を致しました。  
今でもかれひひらめは左側に眼ありたぐひは、眼が二ツとも右側  
に付てゐるのであります。めでたしく。

お伽理科百話終



文學士 高木武先生著 (洋裝美本)

新版

# 青年作文辭林

定價金 八拾錢

郵稅金 八錢

●如何にし文章に熟達すべきか? 此の疑惑に迷へる青年諸子に對する著者が熱精なる同情は期せずして此一大快著を生む。徒らに難解なる作例を羅列し、其間に自習上の統一を忘れたる在來の作文書は諸君に果して何を教へたりや。著者は深く此等の弊に鑑み最も新なる形式に基き理論と實例とを以て各種の文體に懇切平易なる説明を與へ、加ふるに平明なる各種の解題を以てし、就中諸君が日常に重要な日用處世文は著者の最も多くの力を致せる處なれば、初學者の獨習書、補習教科として諸君の新福音たるを信じて疑はず。

發行所

東京本郷森川町一  
振替東京九三〇八

育成會

明治四十四年六月十六日印刷  
明治四十四年六月十一日發行

定價金參拾五錢

著者 育成會編輯部

右代表者兼  
發行所 石川榮司  
東京市本郷區森川町一番地

印刷者 檀山定吉  
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社  
東京市神田區三崎町三丁目一番地

不許  
複製

發兌元

東京本郷森川町一  
振替東京九三〇八

育成會



育 成 會 發 兌

文學士 高木武先生著

家庭教訓道話

定價金四拾錢  
郵税金四錢

育 成 會 編 纂

歐米公德美談

定價金貳拾錢  
郵税金四錢

育 成 會 編 纂

お伽理科百話

定價金卅五錢  
郵税金六錢

おもしろきお伽理の内に智識を得、これ本書の特色なり

東京市本郷區森川町一丁目番地  
振替口座東九千三百〇八

入 學 の 手 引

文學士 近藤敏三郎先生編 (高評十版)

師範學校  
中學校  
高等女學校

入學豫習讀本

定價金四拾錢  
郵税金六錢

育 成 會 編 輯 部 編

(高評三版)

高等女學校  
中學校  
幼年學校

入學豫習作文

定價金卅五錢  
郵税金四錢

佐藤益助先生著

(高評增訂十四版)

幼年學校  
中學校  
高等女學校

入學豫習算術

定價金三拾錢  
郵税金四錢

發行所 東京市本郷區森川町八 育成會



育 成 會 發 兌

育 成 會 編 (高評)

兒 童 史 上 の 錦

定 價 金 四 拾 錢  
郵 稅 金 六 錢

巖 谷 小 波 先 生 校 閱  
諸 星 絲 遊 先 生 著

(高評)

ア ア セン ダ  
お 伽 噺 集

定 價 金 七 拾 錢  
郵 稅 金 八 錢

育 成 會 編 (高評)

學 校 家 庭 話 の た ね

自 一 卷 至 七 卷  
定 價 各 金 拾 五 錢  
郵 稅 各 金 四 錢

第一二編泰西名話○第三四五編印度名話○第六七編ギリシヤ名話

東 京 市 本 郷 區 森 川 町 一 番 地  
振 替 口 座 東 京 九 千 三 百 〇 八



268  
135



東京會  
育成會